

佛神
感應之實現

全

特₁₁₆

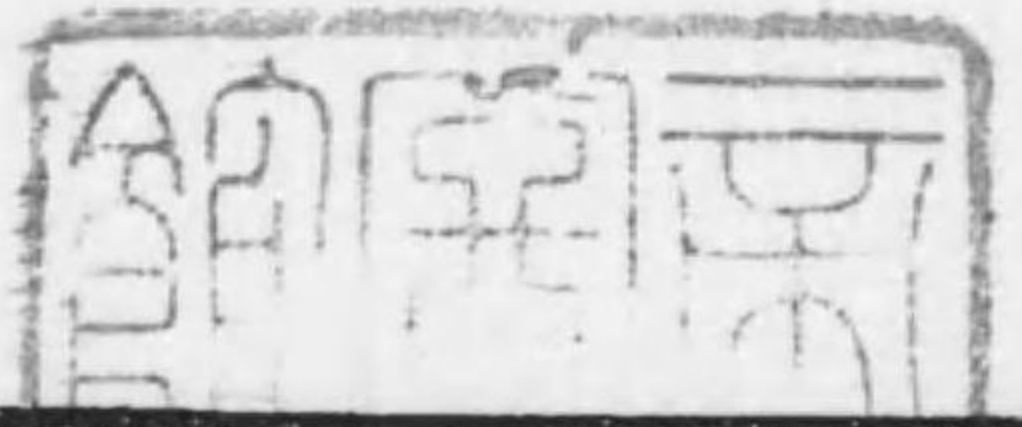
9



始



行116
9



沙門乾順著

神佛

感應之實現

妙法寺藏版

大正
10 12 5
丙交

凡例

予の熱誠の期望は、緒言に己に叙述したり、現時も神佛に日日奉仕し、勤行は怠ら
らずと雖も、而も淺徳にて世益の些少を愧るが、老齡の頽軀なるゆゑ、何時終焉
の日來るも遠からずと覺悟し居れり、古今の高徳僧は死に臨み、種種の遺訓者
も有るが、其事は企及すべからざる故、健全の時に於て死期を決定して、知人の
信者へ信念に關する要件を録して、信念を益々敦厚ならしめ、各自の心願を圓滿
に成就を念じて居る、本書の標的は、信者諸氏の願望成就に、且亦處世に緊要欠
べからざる要を摘み選定し、茲に多年自身に實地躬行し、將亦體察して實踐を
勵行し、神佛の慈悲を感得し、肝に銘し居る事項である、釋尊の最上無比の經卷
を布衍し、口演して眞意を徹底せしむるは、法に精通し、能辨の富婁那尊者は知
らず、予の如き鈍舌の及ぶべき業て無く、止を得ず、國譯を以て、概意を叙したる
に過す、請ふ之を諒察して、猶靜思して深く味ひたまへ。

是に諸説を讀了りたる讀者は何なる感想を惹起せしや、佛菩薩の慈悲の方便も無量なる靈應の廣大を感得して、人生の不可解等の疑雲亦は種種の迷霧も自ら發散して、神明佛陀の眞意を知る處あらは、從來靈符神を信仰せらるゝ處の信念か、一層堅固と成り、茲に嚴然たる光輝を發起し、靈應の實現し來り、更に禎祥の幸福を厚く享得らると欲ふ、猶亦一步を進め、社會の繁雜の百事を處すに活用し、日常處世に意義を應用し、便宜を得らるゝに到れば、予の頗る満足爲す者で有る、若し經論諸説の深甚の靈法を讀誦爲すも、輕信者の如きは、日常の諸事と別物視者は、未だ熟讀に到らずして、佛の方便の眞意を解せざる者の如し、若し是の如き人有らば、熟讀あらん事を渴望す、茲に其應用の假例を設け、其方法を參考の爲に、辨明すること左の如くである。

一 御經は素より諸佛の稱讚したまふ、金言にして、諸論は八宗の祖師龍樹菩薩の御作にして、眞に一言一句も觀難く、聽難き御法で有る、讀者の日常の行爲と、思想と對照し、猶體察して、差異の有る處を考察し、本卷の意義を以て規矩として、活用者は其益を得る事多し、故に再讀して仔細に味ふ事を要す。

一 人界は自身の欲望に汲汲たるも、佛法は慈悲の結晶にして、衆の艱難を自身に受て、忍辱を行じ、衆生に廣く圓滿の福德を與へんと誓願したまふ、菩薩は如意寶珠を求め得て、恰く衆生に施與したまふ時も有るが、惡世の末世に其菩薩は會ひ難しと雖も、然るに幸ひ大般若に遇ふ事を得るゆゑ、之を讀誦し、供養し、信念せば、是則ち寶珠に優る功德を享け、人世の五欲の大願を完備に成就し、富貴の歡樂を得る寶典で有る。

一其五欲を圓滿に享んと欲する者は、努て精進を勵み勤行の實行に有り、精進とは文字の如く精力を勵し、勉て勤行を怠慢無き類を謂ふ、豈に常人に對して、啻に菜食のみを斷行を、衆人に勸る意にあらざる、彼の戒律僧の如く、乾順は菜食を斷行して居るが、是れは齋戒といふ、末世は僧すら稀少で有る故に、常人にはせめて一日戒等を以て、罪障を消滅したまふ類を勸るので有る。

一靈應を享る事は、譬は鐘を撞て音響を發るが如し、信念の厚薄に由て、緩急の等差が有る、所以は、譬は田園に種子を蒔植するに、發芽生育に自ら其性質に由て遲速あるが如し、且復靈應に差が有つて、一一に算へ難きも、先づ無病健康にして、家業の繁榮等の喜悅も有る、或は時に己が思慮に及ばざる事起り、其際に一心不亂に念ずれば、不圖良方法を自ら按出し、圓滿に事の解決

の道を得る乎、亦是は意想外の人より、便宜を得るの類等もあらん、故に一概に論斷すべからず。

一人界の一世に無礙の者は、有徳者で稀少で有る、其所以たるや、我身に好都合を皆歡ふも、他人は之を歡ばざる事有り、是に於て事故起易きか常にして、所謂煩惱を斷截し盡すことは、是佛の境界の外に無し、故に時に意外の敵が現はる事あり、其障難を防禦の道は、毎に御經と靈符に供養を怠る無く、信念深き人の仕事が、概ね無難に成就するの類で有る、是即ち冥冥中の擁護に由る、此故に供養を怠る勿れと勸むのである。

一佛道の禁物は、戒律等種種有るが、第一に人は瞋恚と慢心が、經戒中に懇切に訓誡して有る、多年の善行も一朝の瞋恚の爲に壞り、慢心は増上慢と謂ひ、自負より他人を誹謗し、是亦善行を自ら破

る類で有る人間は兎角に己の好事を陳列して自ら飾るが病で
 有る次に疑議も信念の薄より起る譬は己に久しく信仰するに
 著しき靈應を享けぬと感應の遲速を論談じ己れの缺如ある点
 を反省し或は己が缺点を見出すが當然で有る然るに神明佛陀
 に對して督促する如き意の者が有る常人に此事甚だ多し心得
 へき要件で有る。
 此等の弊害は一日も疾く至心に懺悔して先づ己れの行爲を正
 し時期を待ては自然に感應か實現し來る素より懺悔の根本は
 現世の非のみを謝罪する義で無く無始より諸有の中に輪廻し
 て身口意業より生ずる罪を陳懺するので有る彼の病毒は總て
 信仰上の大禁物である此惡病を自ら除去し得ば必然靈應を享
 け求ずして吉祥事湧出し在家は家業日に月に盛旺にして家政

豊富に百事如意ならん猶一言す信仰の極意は精神を堅固に決
 心を動かさず努て勵行の外に無かるべし。

一本卷の智度論は原百册である其中より撰擇して僅に一卷と爲
 したり故に經文も往往節畧の處多し若し進て詳細を知らんと
 欲する士は原本に就て見よ唯長文は倦怠を虞て及ぶ限り簡潔
 を努めたり亦傍訓は通俗に従ひ衆人の讀易く意義の解し易き
 を旨趣とせり識者は濫に言を爲す勿れ唯要を摘み婆心を録す
 爾。

沙門乾順謹識

○大般若理趣分の讀誦を勧る辨

凡そ人世に期望を圓滿に得る道は、御經の讀誦に有るを多年實驗し得たり、惟るに我國中古の世佛敎盛にして、高德の僧が弘法の時代に在ては、著名の神社伊勢及び諸國に讀誦を修行せられるが如し、今も近江國の神社に御經を所藏し有り、聞く人世は兎角に障難煩悶の事起り易し、且亦神佛を信念者は感應を享る者に遅速有るを見る、各人が感應を享る者も宿業に輕重有る故、一律の下に論斷成り難し、是に於て其宿業の消滅の捷徑を求め、遂に大般若の理趣分に優勝のもの無きを知悉し、御經を讀誦し供養せしめんと欲して、這回御經を國譯して刊行する所以である。

抑も大般若波羅蜜多經は、諸佛菩薩の成道法を教へたまふ貴重の御經にして、古より世人既に廣く傳聞し、周知の事に囑すと雖も、無上最尊の義を不知者の爲に其梗要を辨明せん、御經は六百卷にし

て、其中の五百七十八卷を理趣分と題稱し、是則ち佛教の秘要心髓たる金言を説きたまふ故、諸佛皆讚歎せらるゝ處の緊要の卷である。

往時釋尊出世の際に、洽く群生を濟度したまひ、御弟子無數にして、既に聲聞、阿羅漢の地位に昇進の聖者の爲のみならず、最上位の諸佛、摩訶薩も、大般若を傾聽ましますことを、大智度論に説きたまふ。此故に聽聞し讀誦すべき所以を敘述せん、今茲に御經を國譯して、文は平易なれども、而も佛界と人界とは、地位に懸隔有る教を一讀の下に義理を了解し得ざる者あらん、是れ人の賢愚の差別にあらざる地位の等差である、將亦人界に生る者は、宿世の罪業に輕重あり、若し宿世に衆の善根を植ゑ、久しく大願を發したる因縁有者に非ざれば、聽聞し、書寫し、讀誦し、供養し、恭敬し、思惟し、修習する事も不

能ぬと説き、復手に觸れ身に在ることあらば、天人の禮敬せらるゝと説て有る、固より大乘經典は、彼の聲聞、阿羅漢も難解の教なれば、經中に種種の譬論を擧て、義理を解せらる、況や常人が拜讀に於てをや、此故に御經に曰く、一字一句を聽聞者も、惡趣に墮すと説き、實に無上最尊の所以は、是の如し、佛は慈悲の根本にして、廣大無邊の功德を施したまふ、深甚微妙の靈法である、之に由て篤志の信者を撰み、讀誦あらん事を特に勸奨こと緊切である、最も所説の御經ゆゑ一讀より再讀が功德を多く受く、猶進て毎日拜讀者は、假令文意は不可解者も、人生に厭ふ處の横災等の苦惱を免るのみならず、自然に吉祥幸福が實現し來る、是即ち宿業消滅し、特に惡魔を降伏したまふ、無比の寶典である、上は大梵天帝釋天等を始として、四大天王及び十六善神が、常に讀者を守護在るに因る、其徵證たる不徳の乾

順が、毎日理趣分を讀誦し、祈念に實行を勤む、無畏城の盛衰を一見者、靈應の何たるを知るべし、亦其座に參拜し、聽聞者は健全に幸福を享る者、復は難病の平癒等の靈驗を享る者は、枚舉し算ふるに違なきを以て、爰に其二三を示す而已。

惟るに現代の社會は、澆季復雜の時にして、事故起り易く、其所以たるや、各人は向上を争ひ、望み、皆一步を進んと焦慮せざる者無く、是れ期圖を成就すべき、所謂種子を植ずして、唯欲望のみを達せんと謀るは、譬は農家が田園を有も、種子を蒔かず、耕耘を務ずして、收穫の期を待つ者の如し、此故に其種子と成る御經を聽聞し、讀誦し、復は供養の實行を勤む、此供養は各人の心願成就の捷徑で有る、若し家業繁忙の者は、靈符神前に於て、唯大般若波羅蜜多經と、經名を且夕に一、心不亂に信念をこめ、日日に唱へ、供養を勵行者は、漸次に廣大

の功德を享け、應分の幸福を得、特に人より優勝の地位を得んと謀る者は、聽聞讀誦供養等の善行を努め、益精進の者は、終に衆人の羨望の地位を占る事を得ん、蓋し御經の威徳の廣大にして、微妙の法力有るに因る、假令常人か經意の不可解なるも、無量の功德を現身に受る證で有る。

夫れ人界に富貴の歡樂が有る之を佛敎に五欲の樂といふ、其五欲を成就の道は、先づ徳行を累積たる、根基の有るの財寶は、子孫に永く傳へ有つ事を得、是即ち順序で有る、然るに無徳行の者が、欲望のみ齷齪して、適に僥倖に會し、假に無数の財寶を得たる、近時の成金者が、五欲を専肆にして、濫に驕奢し、放逸者の盛衰の情況を見よ、恰も葉上の露の如く、無根の花、瓣が艶色を傲るが如し、是に由て徳行の道を勧め、五欲を永續し有つことを諄諄と喋喋するのみ、予獨り

徳を稱へ勸るに非ず、其徴は左項の如し。
 畏くも明治聖帝の教育勅語は、徳を三段に分ち教誨を下賜し
 たまひき勅語の解は舊日に拙著に録したり聖意を深く味へは、是即ち徳育を切に教へ
 賜ふので有る、子は不肖を顧す御遺詔を奉ずる微意である。
 復竊に按ずるに時弊の餘毒日に蔓延して、教育を受つ、在る、學生
 の徒を始め種種の方面に、人生を不可解視して、往々厭世觀を起す
 徒輩甚だ多し、人生は敢て不可解で無く、能く解決し得らる、佛教が
 久しく傳はり有る、是道に由らずして、自暴自棄の徒の所爲のみ、佛
 教は世法に超越の寶法にして、人智の度に從て教て有る、曰く宿業
 の輕重といひ、曰く三世の因縁といひ、曰く因果の理等をいふ、人の
 智度に應して懇切に説き、法門悉く完備して有る、其道に準據すし
 て、嘗に人生不可解を唱へ、無謀自滅の徒を惜み悲しむ、若し其れ佛

教の眞理を知る信者増加せば、是の如き失態に陥る者なからん乎。
 素より人世に生老病死の苦を免る者無く、一生中に障難憂患の事
 が屢起り易く、或は自ら困苦懊惱より艱難に陥り易し、兎に角無事
 は少く、多事多しと雖も、恐らく此道に準據者は百事も疾く解決し
 凶事を輕減して、自然に吉事に遇ひ歡樂を得ん、是即ち佛教を奉じ
 勵行者の特色で有る、故に録して緒言と爲す、予か微意を洞察し實
 踐あらは幸甚矣。

大正在辛酉歲盛夏吉辰

城東於無畏城

沙門乾順七十二叟謹識

神佛感應之實現

沙門乾順 謹撰



予不徳を願す巖に鎮宅靈符神と題して拙書を發行し人の好む富貴の歡樂及
ひ息才延命を始として人事に關する二十八種の諸願成就する靈符尊神を祭
祀し供養法等を蒐輯して信仰の道を教へ宣傳し茲に歲霜を閱する十歳を經
過し日月實驗爲するに靈應奇瑞の赫赫たる實現を見る事を得たり今や信者
も日に月に増殖したるが是獨り靈應を享るに非らず信者に於ても家業の繁
昌し難病平癒し水火の厄災を免れ産難無き等一一算ふべからず然るに其信
徒の感應を享る者に遲速有るは是信念の厚薄に由る將亦人界の禍福の根起
たるや皆宿業の輕重に因て身分に等差か有る所以と知る是に由て宿業消滅
の道を諸經論釋に求るに大般若經に優るもの無きを覺悟し適ま大智度論を
見るに大般若の難解の字句を注釋し且亦般若を聽聞し讀誦せんと欲して身

○神佛感應之實現

命を惜まず、艱苦の行を實修し、漸く御經に會し得たる薩多波崙菩薩の記事が叙して有る、此故に其智度論より衆人に了解し易き事項を撰擇し、本卷に摘要を録したり。抑も大般若は無量無邊の大功德を成就し、宿業の消滅と謂ひ、また惡魔を降伏等に靈威の廣大なること擧て敘し、盡し難し、譬は五穀菜蔬を得んと欲せば、田畑を耕し種子を植れば、自然に繁殖を見るが如く、故に信仰の靈驗を見ることも復務め努て聽聞し讀誦し、供養等を實行に有る、若し人智の理論を以て甚深微妙の超越の法を、彼是論議者は宿業を一層増加して、現世に於て艱苦を嘗め、未來は惡趣に墮せん能く本卷を熟讀者は、總ての疑雲の消散を見ん、請ふ佛教の威靈は、實行に由て忽然現實を見るを得べき而已。

●佛法は大海の如く一

問て曰く、諸佛の經は何を以ての故に、初めに是の如くの語を稱ふや。

答て曰く、佛法の大海は、信を以て能入と爲し、智を以て能度と爲す、是の如くとは、即ち是れ信なり、若し人心中に信ありて清淨なれば、是人は能く佛法に入る、若し信無ければ、是人は佛法に入ること能はず、不信の者は、是事是の如くならずと言ひ、信者は、是事是の如くと言ふ、譬は牛皮のいまた柔かならざれば、屈折すべからざるが如く、無信の人も、亦是の如し、譬の牛皮は、已に柔かなれば、用に隨つて作すべきが如く、有信の人も、亦是の如し。復次に經中に信を以て手と爲すと説く、人は手有て寶山に入れば、自在に能く取れども、若し手無ければ、取る所あること能はざるが如し、有信の人も、亦是の如く、佛法の寶山の中に入りて、自在に取る所あり、無信は無手の如し、無手の人は、寶山の中に入りて、則ち所取あること能はず、無信も、亦是の如く、佛法の寶山に入て、都て所得無し。

●念佛の功德廣大二

無量の佛土の諸佛の三昧を念ずれば、常に現じて前に在りと、問て曰く、菩薩の三昧の如きは種種無量なり、何を以ての故に是菩薩念佛三昧すれば、常に現じて前に在りと讚るや。

答て曰く、是菩薩は佛を念ずるが故に、佛道の中に入ることを得、是を以ての故に念佛三昧は、能く種種の煩惱及び先世の罪を除く、餘の諸の三昧は能く嬌を除くこと有れども、瞋を除くこと能はず、能く癡を除くこと有れども、嬌を除くこと能はず、能く毒を除くこと有れども、嬌と悲とを除くこと能はず、能く三毒を除くこと有れども、先世の業を除くこと能はず、是念佛三昧は、能く種種の煩惱と、種種の罪とを除く。

復次に念佛三昧は、大福德ありて能く衆生を度す、是諸の菩薩は、衆生を度せんと欲す、諸餘の三昧は、此念佛三昧の福德の能く速に諸罪を滅する如き者無し。以下略す一二中
二四六に就す

因に云、念佛の功德の廣大は、是の如し、若し悪夢を見て安眠を得ざる者は、將に寢に就んと欲するに臨て、西方へ向ひ南無阿彌陀佛と一心に念じ唱へ、悪夢を見ざる如に願念せば、其夜より安眠爲すこと得、是即ち乾順の實驗を録しぬ。

●疾病の原因三

問て曰く、人は何の因縁を以て病を得るや。

答て曰く、先世に好んで鞭杖、拷掠、閉繫を行ひ、種種に惱すが故に、今世に病を得、現世の病は身を將ゆることを知らずして、飲食を節せ

ず、起臥常なる事無し。是事を以ての故に、病者をして愈ること得せしめたまふ。

亦形残者は具足することを得とは、云何が形残と名くるや。若し人有り先世に他身を破り、其頭を截り、其手足を斬り、種種の身分を破り、或は佛像を壊し、佛像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀ち、或は父母の形像を破る、是罪を以ての故に、形を受ること多く具足せず。

復次に不善法の報ひは、身を受ること醜陋なり。若し今世には賊を被り、或は形戮を被り、種種の因縁以て、殘毀を致す。或は風寒熱病の身に惡瘡を生じて體分爛壞す。是を形残と名く佛の大恩を蒙て、皆具足することを得べし。卷の二第八 三〇四に載す

● 一日戒の功德四

問て曰く、白衣の居家は、唯此五戒のみなりや、更に餘の法有りや。

答て曰く、有り。一日戒と六齋日戒を持ては、功德無量なり。若し十二月一日より十五日に至るまで、此戒を受持すれば、其福最も多し。

問て曰く、云何が一日戒を受るや。

答て曰く、一日戒の法を受るには、〔戒の作法は〕長跪合掌して、是の如く言ふへし。我某甲、今一日一夜、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと、是の如く二たび、是の如く三たびし、歸依す。我某甲、佛に歸依し、竟り、法に歸依し、竟り、僧に歸依し、竟り、我某甲、若くは身業不善、若くは口業不善、若くは意業不善にして、貪欲、瞋恚、愚癡の故に、若くは今世に、若くは先世に、是の如き罪あり。今日誠心に懺悔す、身清淨に、口清淨に、心清淨ならん。八戒を受行するは、是れ布薩なり。諸佛の壽を盡すまで、殺生したまは

ざりしが如く我某甲一日一夜生を殺さざるも亦是の如し諸佛の
 壽を盡すまで盗したまはざりしが如く我某甲一日一夜盜せざる
 も亦是の如く諸佛の壽を盡すまで姦したまはざりしが如く我某
 甲一日一夜姦せざるも亦是の如し諸佛の壽を盡すまで妄語した
 まはざりしが如く我某甲一日一夜妄語せざるも亦是の如し諸佛
 の壽を盡すまで飲酒したまはざりしが如く我某甲一日一夜飲酒
 せざるも亦是の如く諸佛の壽を盡すまで高大なる牀の上に坐し
 たまはざりしが如く我某甲一日一夜高大なる牀の上に坐せざる
 も亦是の如し諸佛の壽を盡すまで花の瓔珞を著けたまはず香を
 身に塗りたまはず香薫の衣を著けたまはず香を身に塗らず香薫の衣を著けざるも
 亦是の如し諸佛の壽を盡すので自ら歌舞し樂を作したまはず往

つて觀聽したまはざりしが如く我某甲一日一夜自ら歌舞し樂を
 作さず往つて觀聽せざるも亦是の如し己に八戒を受けたり我某
 甲一日一夜中を過て食せざるも亦是の如し我某甲八戒を受
 甲一日一夜中を過て食せざるも亦是の如し我某甲八戒を受
 行し隨て諸佛の法を學するを名けて布薩と爲す願くは是布薩を
 持て福報生し生れて三悪八難に墮ちざらん我亦轉輪聖王梵釋
 天王の世界の樂を求めず願くは諸の煩惱を盡し薩婆若を逮得し
 佛道を成就せん」と。
 在家の戒法は此外に五戒あり其作法有るも茲に省く。十三卷五〇 四に觀す六齋
 日に八戒等を受るには毎月の八日、十四日、十五日と、廿三日と、廿九
 日と、三十日との六箇日なり此日は四天王が人の善惡を伺ふ日、又
 は惡鬼が人を伺ふ日と稱して諸事を慎み殊に正午を過て一切の

食物を絶つが故に齋日といふ齋とはつゝしむと訓む復潔也洗心
曰齋とあり。前同上に載す

●常人と阿羅漢の差異 五

凡そ常人は毎に煩悶の事多き所以は自ら六情を守る能はざるに
因る阿羅漢は心調ひ柔軟なり若し恭敬し供養し瞋恚し罵詈し搥
打する者あるも心等しうして異なること無く若し珍寶瓦石を得る
も之を視ること一等なり若し刀を持って手足を斫截者あり梅檀を
持て身を塗る有るも亦等しうして異なること無し。
復次に嬌欲瞋恚橋慢疑見の根本は己に斷たるが故に是を心調ひ
柔軟なりと謂ふ。
復次に諸の阿羅漢は欲染に處して染す瞋處に應じて瞋らず癡に

處して癡かならず六情を守護す是を以ての故に心調ひ柔軟なり
と名ふ偈に説くが如し。

人の六情を守護すること、好馬の善く調ふが如く是の如きの
實智の人は、諸天に敬視せらる。

諸の餘の凡夫の輩は、六情を守護すること能はず欲と瞋と慢と癡
と疑見とを斷たざるが故に、調柔ならざること悪弊の馬の如し。是
を以ての故に諸の阿羅漢を心調ひ柔軟なりと名ふ。

●阿難は世世忍辱 六

佛の弟子の中に阿難は、世世忍辱にして瞋を除く。是因縁を以ての
故に生れて便ち端正なり。父母其端正を以て見るもの歡喜するが
故に阿難と字けたり。是れ先世の因縁の字とす。云何か父母字を作

るや。父は斛飯王の二子提婆達多と阿難なり。
 阿難は端正清淨なること、好く明かなる鏡の如し、老少好醜容貌顔
 狀皆身中より現し、其身は明淨なり。女人之を見れば欲心即ち動く、
 是故に佛は阿難の肩衣を著覆することを聽したまふ。是く阿難は
 能く他人の見る者の心眼をして、歡喜せしむるか故に阿難と名く、
 是に於て論を造る者讚て曰く。
 面は淨かなる満月の如く、眼は青蓮華の若し。佛法の大海水は阿難
 の心に流れ入りて、能く人の心眼を以て見る者をして大に歡喜せ
 しむ。諸の來て佛を見たてまつらん事を求むれば、通現して宜しき
 を失はず。第三、一ニ
六に就す

●菩薩は慈心の修行七

一切衆生は常に衆苦あり、胎に處しては逼隘して諸の苦痛を受け、
 生るゝ時は迫進して骨肉破るゝが如く、冷風身に觸れて劍戟より
 も甚だし。是故に佛の言はく、一切の苦の中に生苦は最も重しと。
 是の如く老病死の苦種種の困厄あり、云何を行人は復其苦を加へ
 ん、是を瘡中に復刀を以て破ると爲す。
 復次に菩薩は自ら念ずらく、我應に諸餘の人の常に生死の水の流
 に隨ふか如くなるべからず、我は當に逆流して以て求めて源を盡
 し、泥沍の道に入るべし。〔泥沍とは〕一切の凡人は侵至れば則ち瞋り益
 至れば則ち喜び怖處には則ち畏る、我は菩薩たり、彼が如くなるべ
 からず。未だ結を斷ぜずと雖も、當に自ら抑制して忍辱を修行し、惱
 害をも瞋らず、敬養をも喜ばず、衆苦艱難を怖畏るべからず。當に衆
 生の爲に大悲心を興すべしと。

●瞋は大惡の因八

諸の煩惱の中に瞋を最も重しと爲す不善の報の中に瞋の報は最も大なり。餘の結には此重罪無く釋提婆那民の佛に問へる偈に言ふが如し。

何物か殺して安穩なるや、何物か殺して悔ざるや、何物か毒の根なるや、何者か一切の善を吞滅するや、何物か殺して讚るや、何物か殺して憂ふる無きや。

佛答て言はく、瞋心を殺せは安穩なり、瞋心を殺せは悔ず、瞋は毒の根たり、瞋は一切の善を滅す、瞋を殺せば則ち憂ひ無しと。

菩薩思惟すらく我今悲を行じて衆生をして樂を得せしめんと欲す、瞋は諸善を吞滅して一切を毒害することを爲す、我當に云何か

此重罪を行すべき若し瞋恚あれば自ら樂利を失す。云何が能く衆生をして樂を得せしめんと復次に菩薩は衆生を慈念すること猶赤子の如くす。閻浮提の人は諸の憂愁多く歡日あること少し。若し來つて罵詈し或は讒賊を加ふるも心に歡樂を得、此樂は得難し。恚まゝに汝は之を罵れ、何となれば我本發心して衆生をして歡喜を得せしめんと欲すればなり。復次に世間の衆生は常に衆病の爲に惱まされ、又死賊の爲に常に隨て之を伺ふ。譬は怨家の恒に人の便を伺ふが如し。云何が善人にして、而も慈愍せざらんや、復苦を加へんと欲するも、苦未だ彼に及ばざるに、先づ自ら害を受く。是の如く思惟して彼を瞋るべからず。當に忍辱を修すべし。復次に當に瞋恚は其咎最も深く、三毒の中に此より重き者無きことを觀すべし。

諸の心病の中に第一にして治し難し。瞋恚の人は善を知らず、罪福を觀ぜず、利害を知らず、自ら憶念せず、當に惡道に墮つ、善言を忘失し名稱を惜まず、他の惱を知らず、亦自ら身心の疲惱を計らざるべし。瞋れは慧眼を覆ひ専ら他を惱ますことを行す云云。

復次に瞋恚の人は譬は虎狼の共止むべきこと難きか如く、又惡瘡を發し易く壞し易きが如し。瞋恚の人は、譬ば人の毒蛇を見ること喜ばざるが如し。瞋を積む人は惡心漸く大にして至るべからざるに至り、父を殺し、君を殺し、惡意を以て佛に向ふべし。一十四、五四

●成就は精進九

問て曰く、菩薩は精進を觀じて何の利益あれば、而も勤修して懈らざるや。

答て曰く、一切の今世後世の道徳利益は、皆精進に由て得らる。次に若し人自ら身を度せんと欲せば、尙當に勤めて急に精進すべし。何に況んや菩薩は誓願して、一切を度せんと欲するや。讚精進の偈の中に説くが如し。

人あり身を惜まず智慧の心決定し、如法に精進を行ぜば、求る所の事難きこと無し。農夫の勤めて修すれば、收る所、必ず豐實なるが如し。

若し天上に生ずることを得ると、及び涅槃の樂を得ると、是の如き因縁は皆精進力に由る。

天に非らず無因に非らず、自ら作すが故に自ら得。誰か智慧ある人にして、而も自ら勉勵せざらんや。三界の火の熾然なること、譬は大火焰の如し。有智決斷の人は、乃ち能く免離ること得。是を以

ての故に佛告たまはく。
阿難よ正しく精進して、是の如く懈怠せざれば、直に佛道に至る。勉
強し勤修して地を穿ては、能く道を行くが如く。如法に精進して懈
らずんば、無量の果必ず得て、此報は終に失はざらむと。十五、五六
六に載す

●聽經と受持十

佛諸の大菩薩の爲に不可思議解脱經を説きたまふに、舍利弗、目蓮
は佛の左右に有て、而も聞くことを得ざりき。是れ大乘の行法を聞
く因縁を種ゑざるを以ての故なり。譬は坐禪の人は一切處に定の
中に入りて能く一切をして、皆水皆火ならしむるも、而も餘人は見
ざるが如し。不可思議解脱經の中に廣く説が如し。盡く受持せんと
欲するとは、聞て奉行するを受と爲し、久久に失せざるを持と爲す。

私に云く。

經中の所々に經を聽く、又は受持といふことか見へる、此意を以
て了解すべし。三十三、四
一七に載す

●天壽と人壽の差異十一

夫れ四天王の壽は五百歳なるも、人間の五十歳を四天王處の一日
一夜と爲し、亦三十日を一月と爲し、十二月を一歳と爲す、此を以て
歳壽五百歳は人間の九百萬歳と爲る、菩薩の能く是功德を作す者、
或は近く成佛せんに、初生の四天に値ふことを得べきに足ると謂
へり。卷八の内
に載す

天界の長壽を有ち歡樂を享る所以は、是即ち宿徳の果報に因る、ま
た人界に生る者も、是亦宿徳の果報なり。今や末世にして漸漸に短

縮して、人壽を五十歳と謂ふ。其一世を消日するに貴族に成育し、或は富豪に生れて歡樂を恣まゝにして、世人の羨望する者は、是復宿徳の果報なり。故に現世の禍福は、宿世の應報に由るを知了せよ。若し現世に薄福の者は、努て善行を修し、好因を種ゑ、好果を得る。工風を勵行爲すべし。殊に澆季の現世は、五欲熾盛にして、各自晝夜に焦慮し、一步を超越せんと、競争甚だしく、優勝劣敗は免れ難き故に、當然の期望であるが、是本懐を達するには、彼の宿徳に起因することを忘るべかず。若しそれ宿徳の淺薄の者は、悔るに及ばず、自ら修徳の因を植うれば、好果を得る時期必ず到來すべし。適に僥倖に志望を達すと雖も、宿徳の何たるを不知者は、時變に遭遇して、また本の落魄に陥る者多く、是に於て煩惱累起して、甚だしきは、人生を悲觀するに至る。人世は求めざる災厄事故は、累起して止まず。此厭ふべき災

厄を軽く免れ、且亦煩悶を斷滅の道は、佛教の特色なり。其教とは一日の戒是なり、毎月一日間佛事の善行を實修せば、其功徳を必ず受く、之を勤めて止まざれば、煩悶の事故を減少せん。彼の五欲の煩惱か、善行を修するを、防げ、善事の實行者は、稀少なり。謂る好事魔多しと有るが如く、克己て善行を修せよ。

茲に人間が一日の戒法を受持の功徳は、經釋に佛界の十年の行に相當すと謂へり。況んや六齋戒を受持せば、六十年に當る功徳を受く、故に人世の欲望を達せんと欲する者は、毎月何日なりとも精進し、齋日を務め、積徳爲すことを勸奨て止まず。

四に云此一日の善行は佛界の十年に當る等の比例の評説は、大藏經及び論部の何卷に有りしかを忘る若し差あれば他日訂正する事もあるべし

●菩薩は徳を集る厚く 十二

此故に所生の處に在て、衆生皆來つて菩薩を敬仰す。利益を蒙るこ
 と重きを以ての故なり。若し菩薩の壽を捨るを見ては、則ち是の願
 を生ず。我當に菩薩の爲に、父母妻子眷屬と作るべし。何となれば善
 人に習近すれば、功德を増益すること知ればなり。
 閻浮提の人の貧窮なるを見て、如意珠を求めんと欲し、大海に入て龍
 王の宮に至る。龍は太子の威徳の殊妙なるを見て、即ち起て迎逆し
 前に供養を延て、而も之に問て曰く、何ぞ能く遠く來るやと。太子答
 て曰く、我が閻浮提の衆生を憐愍するが故に、如意寶珠を求て以て
 之を饒益せんと欲すと。龍の言く、能く我が宮に住し、供を受ること
 一月せば、當に以て相與ふべしと。太子は即ち住すること一月にし
 て、龍王の爲に多聞を讚歎するに、龍は即ち珠を與ふ。是如意珠は能
 く一由旬を雨らす。龍の言く、太子に相あり、久しからずして作佛せ

ん。我れ當に多聞第一の弟子と作るべしと。時に太子は復一龍宮に
 至て、珠を得。二由旬を雨らし。二月神通力を讚歎す。龍の言く、太子作
 佛せんこと久しからじ。我れ當に神足第一の弟子と作るべしと。復
 一龍宮に至て、珠を得。三由旬に雨らし。三月智慧を讚歎す。龍の言く
 太子は作佛せんこと久しからず。我れ當に智慧第一の弟子と作る
 べしと。諸龍は珠を與へ己つて言く、汝が壽命盡きなは、珠は當に我
 に還すべしと。菩薩は之を許す。太子は珠を得て、閻浮提に至るに、一
 珠は能く飲食を雨らし。一珠は能く衣服を雨らし。一珠は七寶を雨
 らして衆生を利益したりと。
三十三、四
 五八に載す

●死 生 滅 の 因 十三

問て曰く、人の死生の因縁あること無し、何となれば人は死して滅

に歸すればなり滅に三種あり一は火に焼れて灰と爲り二は蟲に食れて糞と爲り三には終に土に歸す今は但其滅を見るのみにして更に出る者ありて後身を受るを見ず見ざるを以ての故に則ち無と爲すことを知る事。

答て曰く若し汝は身滅して便ち無なりと謂はば云何が衆生の先に習ふ所の憂喜怖畏等あらんや小兒の生るゝ時に或は啼き或は笑ふが如き先に憂喜を習ふが故に今人の教ふること無くして而も憂喜續生す又犢子は生れ乍らにして乳に趣く事を知り猪羊の屬は其生るゝこと未だ幾ばくならざるに便ち牝牡の合あることを知るが如し子は父母を同うするも好醜貧富聰明闇鈍各各不同なり若し先世の因縁ならんは異なること有るべからず是の如き等の種種の因縁を以て後世あることを知る又汝は先に別に去

る者あることを見ずと言へり人身中には獨り眼根のみ能く見るに非らず身中の六情は各所に知あり聞くべく嗅ぐべく味ふべく觸るべく知るべき者あり聞くべき法すら尙見るべからず何に況んや知るべき者をや生あり死ある法も亦見るべく亦知るべし汝は肉眼の故に見ざるなり天眼の者は了了に能く見人の一房より一房に入するを見るが如く此身を捨て後身に至るも亦是の如し若し肉眼を以て能く見は何ぞ天眼を求ることを用ゐん若し爾らば天眼と肉眼と愚と聖とは異なること無けん汝は畜生に同する見を以て何ぞ能く後世を知るべき者を見ん人の死生の如きは去來する者無しと雖も而も煩惱盡きざるが故に身情意に於て相續して更に身情意を生ず身情意の造業は亦後世に至らざるも而も是因縁に従ひて更に生れて後世の果報を受く今世の五衆の因縁

の故に、更に後世に生れ五衆の行業相續して、異ならざるが故に、而も果報を受く。又冬木は未だ華葉果實あらずと雖も、時節會を得れば、則ち次第に而も出るが如し、是の如き因縁あるが故に、死生有ることを知る。三十八、五
六八に就す

●布施の功德功果 十四

問て曰く、若し菩薩に因りて飲食等及び諸の寶物あらば、人は何ぞ力作して生を求め、諸の辛苦を受けて乃ち得るや。
答て曰く、飢餓切の時は、人は其功力を設くと雖も、亦得る所無く、其は衆生の罪重きを以ての故なり。菩薩は世世に布施持戒善心を讚歎す。是三福の因縁の故に、上中下あり上なる者は念ずれば、便ち得中なる者は人中に尊重せられ、供養自ら至り下なる者は施の功力

に由て乃ち得る。是を以ての故に菩薩に因りて得と説くことは、實にして虚ならず。樂の因縁は甚だ多く稱て計ふべからず。今佛は畧して天樂人樂涅槃樂とし、皆菩薩に由て得と説きたまへり。此中に佛は自ら説きたまはく、菩薩は六波羅密多に住して自ら布施を行し、亦衆生をして布施を行せしむ。衆生自ら布施を行すと雖も、菩薩の教導なければ、則ち行すること能はず。
問て曰く、解脱の樂を除いて、此天樂人樂の二種の樂は、是れ衆生の結使を生ずる處にして、貪欲の因縁の故に、恚を生ず。菩薩は何を以てか結使の因縁を教導するや。
答て曰く、菩薩には咎無し、何となれば菩薩は慈悲清淨にして、衆生に樂の因縁を與へ、修福の事を教ふればなり。若し衆生清淨にして、福德を行すること能はざる者あらんに、菩薩に於て何の咎があら

ん人の好心にして井を作り、盲人其中へ墮て死せんに、作る者の罪なきが如し。又人の好食を設て人に施し、量を知らざる者多食して患を致さん、施者に罪無きが如し。

次に若し諸佛菩薩にして衆生に福德を作す因縁を教へずんば、則ち天無く、人無く、阿修羅無く、但三惡道を長じて、罪より出ることを得る者なけん。

復次に衆生は樂の因縁の故に貪を生じ、貪の因縁の故に恚を生じ、恚の因縁の故に苦を生じ、苦の因縁の故に罪を生ず。今衆生は第五の罪の中より免れんと欲す、是故に樂を與ふ。四十六、六四九に觀す

●菩薩の慈悲 十五

菩薩は深く衆生を念ずること慈母に踰ゆ。師を信じ恭敬し、諮受す

とは、菩薩は師に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、云何が師を信敬し供養せられん、智徳高明なりと雖も、若し恭敬供養せずんば、則ち大利を得ること能はず。譬は深き井は美水なれども、若し綆なれば、水を得るに由なきが如し。若し橋慢高心を破りて、宗重敬伏なれば、則ち功徳の大利之に歸す。又雨は墮て山頂に住せず、必ず下處に歸するが如く、若し人憍心にして自ら高ければ、則ち法水入らず。若し善師を恭敬すれば、則ち功徳これに歸すべし。六十八に觀す

●欲の爲めに恩を忘る 十六

夫れ恩を知るは是れ大悲の本、善業を開くの初門なり。人に愛敬せられ、名譽遠く聞え、死して則ち天に生し、終に佛道を成ず、恩を知らざる人は畜生よりも甚だし、佛本生經に説きたまふが如し。有る人

山に入りて木を伐り迷惑して道を失す時に暴雨に値ひ日暮れ飢寒し、惡蟲毒獸來りて侵害せんと欲す。是人一の石窟に入る窟中に大熊あり、之を見て恐怖して出づ。熊これに語つて言く、汝恐怖ると勿れ。此舎は温暖なり中に於て宿るべし」と。時に連雨七日なり、常に甘果美水を以て此人に供給す。七日にして雨止む。熊此人を將ひて其道徑を示し、熊は人に語つて言く、我は是れ罪身にして多くの怨家あり、若し問ふ者ありとも、我を見たりと言ふこと莫れ」と。此人答て言く、爾なり」と。此人前み行くに諸の獵者を見る。獵者問て言く、汝は何れより來るや、衆獸あるを見るや不やと答て言く、我は一大熊を見たるも、此熊は我に恩あり、汝に示すことを得すと、獵者言く、汝は是れ人なり、當に人類を以て相親しむべし、何を以て熊を惜むや。今一たび道を失すとも、何れの時か復來らん。汝我に示さば、汝

に多分を與へんと。此人は心變して即ち獵者を將ひて熊の處所を示す。獵者熊を殺して即ち多分を以て之に與ふ。此手を展て肉を取るに二肘俱に墮つ。獵者言く、汝は何の罪か有ると、答て言く、是熊は我を看ること父の子を視るが如し、我れ今恩に背けり、將に是れ此罪なり」と。獵者は恐怖して敢て肉を食せず、持して衆僧に施す。爾の時上座の六通の阿羅漢諸の下座に語るらく、此は是れ菩薩なり、未來世に當に佛と作るべし」と。此肉を食ふこと無く、即時に塔を起て供養す。王此事を聞き勅を國內に下す、恩を知らざる人をして、此に住せしむることなからしめよ」と。又種種の因縁を以て恩を知る者を讚む。恩を知る人の義は、閻浮提に遍く人皆信行す。四十九、一六五に載す

●大般若は今世の功德 其一 十七

今釋提桓因は、更に今世の功德を説く。凡そ増上慢の人は、是れ佛弟子の禪定を得るも未だ聖道を得ざるに、自ら已に得たりと謂ひ。是の人は須陀洹なく、乃至阿羅漢なく、道無く、涅槃無しと聞きて、便ち増上慢を發し、忿怒の心を生じて、是實相の空法を破せんと欲するなり。是般若波羅密多の神力の故に、彼の惡心をして即時に滅去せしめ、終に願を成就す。人が手を以て鋒を障へんに、但自ら其手を傷けて、鋒は損ずる所無きが故に、鬪諍を起す。菩薩は内外の著所を捨て、自ら六波羅密多を安立し、衆生を教化して内外の鬪法を捨しめ、衆生を六波羅密多に安立せしむ。は無量世の福德力を修集して、鬪諍の根を盡すが故に、鬪諍の事有りと雖も、來りて便ち便を得ること能はず。譬ば毒蛇の蝦蟇を食せんと欲して、常に之を隨逐するに、蝦蟇麻祇藥の所に到れば、蛇は藥氣を聞て毒即ち消歇するが如

し。是法を壞る惡人も亦後是の如く。般若波羅密多を行ずる人を、壞らんと欲して、常に之を隨逐するに、若般の力勢を以ての故に、瞋恚邪見の毒は即時に消滅し、降伏して道を得る者あり。弟子に作る者あり、復た道より還り去る者あり。是れ般若波羅密多は、能く無明等の諸の結使を破し、諸の斷常の邪見を破し、能く五衆乃至涅槃に著するを滅す。何に況んや瞋恚、嫉妬、鬪亂の事にして、而も能く滅せざらんや。五十六、三
七十一に觀十

●同 上 其二 十八

問て曰く、今此中には能く般若を受持し、讀誦し念ずる等あらず、但書寫し供養するのみ云何か。是功德を得るや。
答て曰く、是人の所得の功德も、亦上に同じ、何となれば人あり、先づ

已に師の般若の義を説くを聞き、深く入りて愛樂するも、然も文字を識らす、師に違離するが故に、讀誦すること能はず、而も財寶を惜まず、人を雇て書寫し、心を盡して種種に供養せんに、意は讀誦の者と同じ、故に亦功德を得、人の便を得ること能はざるは、諸天守護すればなり、是事信じ難きが故に、佛は菩提樹を以て喩と爲したまへり、佛は般若の力を以ての故に、菩提樹の下に於て、無上道を成じたまひ、無上道の力勢の故に、其處すら猶威徳有つて、衆生の中に入るに、衆惡は其便を得ず、何に況んや般若波羅密多は、是れ諸佛の母なり、善男子、心を盡して供養せんに、而も功德なからんや。五十七、三、八四に就す

●大般若の功德 其三 十九

問て曰く、闍浮提の人は福利を貪る者多し、何を以てか般若波羅密

多を供養せざるや。
 答て曰く、智人少きが故に、般若を供養することを知らざるも咎なきなり、譬ば金寶も盲者は識らざるが如し、闍浮提の人は、但三寶を信ずる者すら少し、何に況んや知つて、而も能く行せんや、佛は釋提桓因をして、自ら説かしめんと欲したまふが故に、幾許の人ありてか三尊に於て、信等を壞ざることを得るやと、反問したまへり。
 問て曰く、信を壞ざると、疑無きと決了すると、何の差別ありや。
 答て曰く、有る人の言く、差別あること無し、佛は莊嚴して種種に説き、人心を開悟したまへりと、有る人の言く三寶の中に於て、信を壞ざることを得、何を以てか之を知る、疑無きを以ての故なり、何を以てか疑ひ無きを知る、決了するを以てなりと。
 問て曰く、疑無きと決了すると、何の異なることありや。

答て曰く、初めて三寶を信ずるが故に、是れ疑ひ無く智慧を究竟するが故に決了す。譬ば水を度るに、初めて入るは是れ疑ひ無く、彼岸に出づるは、是れ決了するが如し。三分聖戒力の故に信を壞らす。四分力の故に是れ疑ひ無く、正見分力の故に是れ決了す。第九十七、三九〇に載す

問て曰く、若し般若波羅密多の相は、一切の諸觀滅し語言の道斷へ、不生不滅にして虚空の相の如くならば、今何を以てか般若世に在れは三寶滅ぜすと説くや。

答て曰く、般若波羅密多の體性は、佛有るも佛無きも常住不滅なり。此に世に在りと言ふは、所謂般若の經卷を修習し、讀誦すべき者にして、是れ因中に果を説くなり。譬ば井深きに綆短くして及ばざれば、便ち井を失すと言ふも、井は實に失せざるが如し。般若波羅密多の實相は、深井の如く經卷を名づけて綆と爲し、行者書寫し修習する

ること能はざるが故に、滅すと言ふ。

●同 上 其四 二十

問て曰く、一切の般若を説く者は、皆諸天の甘露味を得、其れをして樂説せしむるや、不や。

答て曰く、不なり。若し行者あれば、一心に佛道を求め、結使を折伏し、衣服淨潔に説法の處清淨に、華香旛蓋を以て莊嚴し、香水を地に灑き、諸の不淨なからしむ。是故に、諸天は歎喜し、亦諸の聽者説法を利益す。多く内外の經書を讀すと雖も、深く般若波羅密多の義に入るが故に、心怯弱ならず、没せず、恐れず、何となれば、般若波羅密多の中には、定法の執るへく、難すべく、破すべきもの有る事無ければなり。次に是般若波羅密多の中に、亦分別して諸法の世間、出世間、常無常

善不善を説き法として有らざる無く備に諸法有るを以ての故に、
 怯まず畏れざるなり。若し但一法あれば則ち闕る所多きが故に恐
 畏あり是菩薩は般若波羅密多を行じ煩惱を折薄し福德を増益し
 て身を熏するが故に威徳敬すべし身は是れ功徳の住處なり故に
 形體は醜陋にして能く作す所無しと雖も猶ほ人の爲に愛重せら
 る何に況んや自然に端正にして能く人を利益するをや。五十八、四
 二三に載す

●般若波羅密多の大功德 其一 二十一

若し人は般若波羅密多を供養するが故に若くは後世に若くは身
 衰心病盡く皆能く除き諸善願事意に随つて能く與へらる。是般若
 波羅密多の大寶を得るが故に諸の怖畏無く乏短する所無きこと。
 譬は無價の寶珠を以て願ふ所を皆得るが如し。

問て曰く摩尼寶珠は、玻璃、金銀、車磔、碼碯、琉璃、琥珀、金剛等の中に於
 て是れ何等の寶なるや。
 答て曰く有る人の言く此寶珠は龍王の惱中より出づ人此珠を得
 れば毒も害すること能はず火に入るも焼くこと能はず是の如き
 等の功徳有りと。是寶珠は常に能く一切の寶物を出だし衣服、飲
 食意の欲する所に随つて盡く能く與へ亦能く諸の衰惱病苦等を
 除く是寶珠に二種あり天上の如意寶珠あり人間の如意寶あり諸
 天は福德厚きが故に珠の徳具足し人は福德薄きが故に珠の徳具
 足せず是珠の著する所の房舎函篋の中は其處も亦威徳あり般若
 波羅密多も亦是の如し如意寶珠の能く在家の人に今世の富樂を
 與ふることに意の欲する所に隨ふが如し般若波羅密多は能く出家
 求道の人に三乗の解脱の樂を與ふことに意の願ふ所に隨ふべし。十五

同 上 其二 二十二

凡そ水の渾濁雑色不淨ならんに、珠を以て中に著れば、皆清淨一色なるが如く、般若も亦是の如し。人に種種の煩惱邪見戲論擾心の渾濁あらんに、般若を得れば、則ち清淨一色なり。如意珠に無量の功德有るが如し、般若の功德も亦是の如し。今當に別相を以て、般若の功德を説くべし。是の如意珠は、但能く悪鬼を除くのみにして、魔天を壊ることも能はず。般若は、則ち能く二事を除く。珠は能く身病を治し、般若は能く身心の病を治す。珠は能く人に治せらるゝ病を治し、般若は能く一切の天龍鬼神の治する能はざる所の病を治す。珠は能く世々に曾て治する所の病を治し、般若は能く無始の世界より來

た、未だ曾て治せざる病を治す。是の如き等の種種の差別有り。猶此他種種に無量の功德有るも、茲に節畧す。卷十一第五十九、四一に就て見よへし問て曰く、何を以てか般若を受持し讀誦し、説くことを解せず、但正しく憶念することのみを解するや。答て曰く、受持し讀誦し説くことは、福德多く、正しく憶念すること、は、能く二事所謂福德と智慧とを具ふるを以て、是故に別説す。人の藥草を採り乃至和合するも、而も未だ之を服せざれば、病を損ずること無く、服すれば乃ち病を除くが如し。正しく憶念するは、藥を服して病愈るが如し。是故に正しく憶念すること、をのみと解く。正しく憶念するの相は、所謂二に非ずして、般若波羅蜜多を行ずるなり。二不二の義は、先に説くが如し。初めに經卷を書するを以て、舍利に勝り、中には經卷を以て人に與ふれば、人をして十善乃

至五神通を行せしむるに勝り。今は受持し讀誦し、説くに受持の邊より正しく憶念するは最も勝れり。諸佛の衆生を憐愍するが故に、爲に其義を解せしめ、解し易からしめたまふことは、自ら正しく憶念すること、に勝れり。是時佛は廣く福德を分別せんと欲するが故に説て言く、若し人あり形壽を盡すまで、十方の佛を供養したてまつるも、他の爲に般若の義を解説するに如すと。此中に勝れる因縁を説き曰く、三世の諸佛は、皆是般若を學して、無上道を成したまへり。と。第六十、四六二に載す

●燈炷品に布施の大功德 二十三

釋して曰く、須菩提は阿鞞跋致の相を聞く時、共に阿鞞跋致の功德を聞き、心大に歡喜し、阿鞞跋致の功德を讚歎する故に、佛に白して

言さく、世尊に阿鞞跋致は大功德を成就し、無量無邊の功德を成就すと。佛は其讚る所を可とし、更に自ら大功德等の因縁を説たまへり。所謂阿鞞跋致の菩薩は、無量無邊の智慧を得、聲聞辟支佛と共ならず。行者は要らず先づ知り、而して後に行じ行じ已つて其功德を受く。是を以ての故に、功德の因縁を説くことは、智慧の無量無邊なるに由ると。智慧とは、所謂般若波羅蜜多なり。菩薩は是般若波羅蜜多の中に住し、能く四無礙智を生ず。一切法の實義中に、智慧無礙無障なれば、既に義無礙なることを知る。已に種種に諸法の名字を分別し、爲に義を説が故に、是を法無礙と名け、是名字は要らず語言に由るが故に、是種種の名字を出す。是名字無礙なり。是法無礙及び辭無礙を得るが故に、便ち諸法の實義を樂説す。是を樂説無礙と名く。菩薩は四無礙の中に安住し、一切衆生の問難するも、能く窮盡するこ

と無く、大海水の傾塌すべからざるが如し。

須菩提は佛の上の二品の中に、阿鞞跋致の具足の相を説下へると聞き、此品に入れり佛は方に四無礙門を開き、更に阿鞞跋致の相を説んと欲し玉ふ是故に須菩提は佛を讚すらく、世尊は智慧無量無邊なり、阿鞞跋致の功德も亦無量無邊なりと佛の言はく、若し恆河沙等の劫に樂説すとも、亦盡すべからず、阿鞞跋致の相貌も亦盡すべからずと、世尊に何等か、是阿鞞跋致の深奥處にして、阿鞞跋致の菩薩は、是深奥處に住し、能く六波羅蜜多、四念處乃至一切種智を具足するやと、佛須菩提を歎じたまはく、汝は能く阿鞞跋致の菩薩の爲に深奥の義を問へりと、佛は須菩提に語り言はく、空等乃至涅槃是を深奥と名くこと。

問て曰く、諸有の法は種種に細に分別するに、人解せざる故に深有

り、空無所有は何を以てか深と爲すや。

答て曰く、直に口に名字を説くに非ざるが故なり。空とは分別して諸有の相を解すするに、内に我有るを見ず、外に定實の法を見ず、是空を得已つて一切の法相を觀するに、皆是れ虚誑にして諸の過罪有り。若し諸相を滅すれば、更に願つて三界に生ずることを作さず、此空は是得道の空にして、但口に説のみに非ず、是故に深と言ふ。復次に空も亦復空なり。若し是空に著すれば、則ち過失有り、是を深と名け、若し空は邪見の有を破するに従ふが故に、出づ、是を深と爲す。若し空中に於ても、亦空に著せざるが故に、亦深なり。復次に五衆の生滅を觀じて常顛倒を破し、畢竟空を觀じて生滅を破す。何となれば、空中には無常無く、生滅無ければなり。生滅無きに二種あり、一には邪見の人の謂く、世間は常に有なるが故に、生滅無

しと。二には生滅を破するが故に、生滅無しといふ。此中には生滅を破して、亦是不生不滅に著せざるが故に、名けて深と爲す。諸の煩惱は除き難きが故に、離欲の寂滅を言ふが故に深なり。錯誤は易く、眞實は難きが故に、如法性實際を深涅槃と爲す。諸の梵天等の九十六種の外道の及ぶこと不可能の所なるが故に深なり。

復次に涅槃の中に、一切の得道の人の入る者は、永く復出でざるが故に深なり。

以上は空と深との義と理を能く説盡したまふが、猶是より一層微妙に説きたまふと雖も、初學に反て難解の虞有れば以下の文を節畧す。

次に須菩提の言く、世尊よ佛は微妙の方便力を以ての故に、菩薩をして色等の諸法を離れて涅槃に處し、亦涅槃にも著せず、亦世間に

も著せざらしめたまふ。是微妙の方便なりと、佛は其所説を可とし、菩薩の諸法實相を行する果報福德を讚歎し、須菩提に告言はく、是の如し、甚深の法は般若と相應し、觀察籌量等の一念生ずる時、無量の

無邊阿僧祇の福德を得と。

問て曰く、二乗の無漏の法すら、尙果報福德無し、何に況んや、大乘の畢竟空の觀法もて、無量の福德を得んや、而も福德は大慈悲より衆

生を愍むが故に生じ、罪も亦衆生を惱害るが故に得るが如しと。

答て曰く、二乗の無漏心の中には、煩惱盡るが故に、果報福德無し、菩薩は煩惱未だ盡ざるが故に、應に福德の果報有るべし。

復次に二乗は實際に於て證するが故に、諸の功德を燒盡す。菩薩は證せずして、更に生有るが故に、便ち福德あり。

復次に人は實事に於て錯誤するが故に、福德少く、正しく實事を行

ずるが故に、福を得ること多し。畜生に施すが如きは百倍の施を得、悪人は千倍の施を得、善人は十萬倍の施を得、離欲の人は十億萬倍の施を得、須陀洹等の諸の聖人は、無量の福を得、凡夫の人は欲を離れ、慈悲心を行わずと雖も、實の法相を得ざる故に、無量の福田を作ることを得ず、須陀洹は未だ欲を離れずと雖も、諸法の實相を分別するが故に、福德無量なり、諸法實相は深淺有ることを得、是故に菩薩は深く實相に入るが故に、一念の中の福德無量無邊なり、此中に念の福德多きが故に、譬喩を説く衆生の心は念念に生滅すと雖も、但相續して生ずるが故に、隨つて滅することを覺らず、嬌欲の人は心に深く着し欲する所に情を遂さる故に心に憶念を生じ、相に取て種種に來らざる因縁の事、所謂彼女は心に自ら悔るが爲に來らず人に遮られて來らずと分別す、是の如き等の多くの覺觀の心を

生ず。是心は覺知し易きが故に、以て譬喩と爲す。是の如き念をもて、一日に事を緣すること一劫に超たり。人濡薬を服くすれば、一歳にして乃ち病を差し、大力の薬を服すれば、一日にして能く差るが如し。菩薩も亦是の如く五波羅蜜多を行し、久久にして乃ち佛と成る者有り、般若波羅蜜多を行して、疾かに佛と成ることを得る者あり。

七十四、八 (卷十三)

◎菩薩の慈悲 二十四

菩薩は是念を爲す、我は小衆生にして形貌才能有り。此事を以て輕んずるは、則ち未來の佛を輕んずると爲す。若し佛を輕んせば、則ち永く了すと爲す。復次に菩薩は是念を作す、我は誓て一切衆生を度せん。

若し衆生に所得無くんば、我則ち幸を衆生に負んと、譬は主人客を請待すれば、則ち應に客を敬すべし。而も自ら卑して、若し供に設る所無くんば、是れ則ち愧を客に負ふが如し。

復次に自ら大心あるを以ての故に、即ち喜んで瞋心を生ず、憍慢は是れ瞋の本なり、瞋は是れ一切の重罪の根なり、若し菩薩衆生に於て下心を起さば、衆生の若くは罵り、若くは打つも、則ち悲根無し、譬は大家の奴を打つも、奴は敢て瞋根せざるが如し、若し菩薩は自ら下意の衆生より高しとすれば、衆生侵害するに忿然として怒を生ず、奴の大家を打てば、則ち瞋怒を起すが如し。下意に是の如き等の種種の利益あるが故に、菩薩は應當に行すべし。安隱心とは今世後世の究竟の樂を與ふ父母知識の如く、現世の樂を與ふるに非ず、菩薩は若し等心慈心下心を以て衆生を利益する時、若し恩を知らざ

る人有り、來つて菩薩を惱し所行を信ぜず、謂ひて欺誑と爲し名を求るが故に、實事有ること無しと爲す。又魔の爲めに使はれ來つて、菩薩を惱ます、惡中の惡は恩分を識らず、菩薩は等心にして、此に於て通達無礙なり。是無礙心を得已れば、衆生に大罪大過有り、雖も、但利益せんと欲して、惱心を生ぜず。慈心安隱無礙もて心を惱まさず、譬は孝子は父母を愛敬し、兄の如く、弟の如く、姉妹兒女の如きは、嬌欲の心無くして、而も愛敬慈念を生ずるが如し。世人は但能く親む所のみを愛敬し、菩薩は普く一切に及ぶ、是柔軟清淨の好心を得ると衆生忍と名く、是法忍の初門なり。一七二、三

●阿鞞跋致の菩薩 二十五

問て曰く、經に説く菩薩は方便力もて、衆生を利益するが爲の故に、

五欲を受くと何等の方便を受るや。答て曰く、譬は鉗を以て火を取れば捉ふと雖も、而も焼ざるが如く。五欲は火の如く能く人の善根を焼く、是菩薩は思惟すらく、我は出家して一身なり云何が能く布施を以て衆生を攝せん、衆生は多く飲食衣服を須る法を用ふる者少しと菩薩は衆生を攝せんが爲の故に、故らに富貴家の家に生れて衆生に布施し、其所須を恣にせしめ、出家在家の衆生を能く廣く利益す。譬は大池より人民鳥獸は、皆利潤を蒙るが如し、是時四種に六波羅蜜多を行す、若し出家布施を讚るには、或は有る人の言く、汝は自ら一身にして財無く、但人をしを以て一切に充滿し、而も施を行することを勧るに、人則ち是れ菩薩を信受す、或は轉輪聖王と作り、心に施を念ずる時、則ち閻浮提に

珍寶を滿す。頂生王の宮殿の中にては、心生じて寶を欲すれば、則ち寶膝に至れるが如し、或は帝釋と作り、或は梵王と作りて、能く珍寶を雨らし、三千世界に滿し、佛を供養したてまつり、一切に充滿す。衆生を攝せんが爲の故にして、而も自らは受ざるなり。人は五欲を受れば、則ち心に憍慢を生じ、人を凌易を起すも、是人は常に嬌欲を斷ずるが故に、諸の煩惱薄くして、憍慢生ぜず、憍慢生ぜざるが故に、衆生を凌易なさず、是を阿鞞跋致の相と名く。

●恆伽提婆品 二十六

此品を釋して曰く、有る人言く、女人は得道の分有り、餘人は分無しと佛法は然らず、衆生の業因縁に隨ふ。譬は良藥の諸病を療治するに、貴賤を擇ばざるが如し。復女人は淺智なりと雖も、而も先世の業

因縁を以て、應に授記を得べし心生じて説んと欲するが故に、佛は自ら説くことを聽きたまへり。

復次に若し佛嘿然として授記を與へたまはゞ、人は則ち疑を生ぜん。何の因縁有るが故に、獨り此女人の與にのみ、記を授けたまふやと、是故に佛は、其自説に因るが故に、而も授記を與へたまへり。

問て曰く、何を以て名けて恆伽提婆と爲すや。

答て曰く、一切は皆名字のみ有りて、識と爲すが故に、何ぞ義を求るに足らんや、有る人は言ふ、是女人の父母は、恆伽神に供養して此女を得るが故に、恆伽提婆と言ふと、恆伽は是れ河の名、提婆は天と名く。是女人は福德の因縁もて富家に生れ、佛法を聞て信樂するが故に、能く金銀寶華金縷もて、織成せる上下の衣、並に自身に莊嚴する瓔珞の具を以て供養し、佛に上つる。佛報るに授記を以てし、是女人

の宿世の所行を觀じて、便ち微笑したまへり。微笑の義は先に説くが如し、此中に小因縁もて、而も大事を起すが故に、佛は微笑したまへり。

問て曰く、是女の福德は應に久しく女人を轉ずべし。何を以て方に阿閼佛の國に於て、乃ち女身を轉ずるや。

答て曰く、世間の五欲は斷じ難し、女人は著欲の情多きが故に、世世に諸の福德を行はずと雖も、男子の身を得ること能はず。今授記を得て諸の煩惱を折薄す、是故に阿閼佛の國に於て、方に男子の身を得有る人は言ふ、此女は宿世に人多く女人を輕ずるを以ての故に、女身の授記を願ふと、是の如き等の因縁もて、女身を轉ぜずして而して授記を得たり。

復次に女人の五礙を説けるに、授記を得ずと説くに非らず、是故に

難を生ずべからず。阿難は是女人の無量劫中に、一佛國より一佛國に至り、廣く功徳を集めて、當來に佛世界を淨むることを得、其中の菩薩は皆三十二相八十種隨形好、無量の光明有ると聞けり。是故に阿難は歎ずらく、未曾有なり。能く是の如く佛國土を淨めば、佛會の如しと爲すと。佛其言を可とし、已りたまふに、阿難は疑ふらく、此女人は希有なり、小法を聞て而も大果報を得と。是故に阿難は問ふ。是女人は何處に從て諸の徳本を殖うるやと。

佛答て言はく、銳光佛我に記を授けたまふ時、是女人は金華を持して佛に散じ、彼に是願を作す。此女人の後に佛と成る時に、亦當に我が記を與ふるを受くべしと。彼は從つて善根を種ゑ、今果報を得たり。○七十五二に觀す

●燈炷品に般若の大功徳を説く 其一 二十七

釋して曰く、般若波羅蜜多を離れて、恆河沙劫に三寶を供養するは、一日般若を行ずるに及ばずとは、一日行ずるが優るを云、又復人有り、壽如恆河沙等の劫に住し、須陀洹等を供養するも、亦一日般若を行ずるに及ばずとは、是亦前の一日に倣へ。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、菩薩は般若を行し、二地を過て菩薩位に入り、無上道を行じたまふと。

復次に菩薩は般若を離れ、如恆河沙等の劫に、財施法施禪定もて福徳を生じ、無上道に廻向するは、一日般若に應じ、財施法施禪定もて福徳を生じ、無上道に廻向するに如ず。是復前意と準しきを云、何となれば般若波羅蜜多には、雜毒なく正廻向なるが故に。般若の功徳

を稱讚するの意なり。
 問て曰く佛は貪る所無く乃至一切種智の佛は無礙にして解脱清淨微妙なり諸佛の法すら尙貪らず何を以ての故に般若波羅蜜多を以て慇懃に阿難に囑累するに貪惜するが如きに似たるや。
 答て曰く諸佛は衆生を利益せんが爲の故に世に出て三十二相八十種隨形好を現したまふ無量の光明神足變化は皆衆生の爲の故なり第一に衆生を利益するは般若波羅蜜多に過たるは無しそは能く諸苦を盡すが故なり是般若波羅蜜多是語言文字章句に因て其義を得べし是故に佛は般若の經卷を以て慇懃に阿難に囑累したまへり。
 復次に有る人は佛の慇懃に囑累したまふを見るが故に佛の大事を辨ずると言ひて猶尙般若を尊重す是法は必尊必妙なり譬は大

富長者の命終らんと欲する時衆寶を以て兒に與へ如意寶珠を以て慇懃に囑累し汝是れ寶を以て定まれる色質無しと目すること勿れと言ふが如し虚空の如きは微妙にして識り難きが故に而も守護せず若し餘寶を失ふるは可と爲すも此寶を失ふべからざるなり大富長者は是れ佛にして般若波羅蜜多を以て阿難に囑累し汝好く受持し守護して忘失せしむること無れと般若を除て十二部經を盡く皆忘失すること有りと雖も其過は尙少なり若し般若の一句を失へば其過は大に多し何となれば是深般若の法藏は是れ十方三世諸佛の母にして能く人をして疾かに佛道に至らしむればなり經中に説くが如し三世の諸佛は皆般若より得乃至聲聞人の爲に法を説きたまふと其中に皆是れ般若の事を讚す。
七十九、二九に説す

●同 上 其二 二十八

次第行とは、四種に六波羅蜜多を行ずるなり。自ら檀を行し、人をし
て檀を行ぜしむ。檀の功徳を讃し、檀を行ずるを讃す。善く慳貪の根
を抜き、深く檀波羅蜜多を愛し、衆生に慈悲し、諸法實相に通達す。是
因縁を以ての故に、能く四種に檀波羅蜜多を行す。或は人あり、自ら
布施を行し、人をして布施せしむる能はず。或は他の瞋を畏れ、或は
己の爲に布施せしめ、之を以て恩と爲すを畏る。是の如き等の因縁
の故に、人を教ふる能はず。或は人あり、人に布施を教へて、自ら施す
能はず。或は人あり、種種に布施の徳を讚歎し、人に勸めて施さしめ、
而も自ら行ずる能はず。ある人は自ら布施を行し、亦人をして布施
せしめ、布施の徳を稱讚し、而も布施するを見て、歡喜する能はず。所

以は何んとなれば、或は破戒の惡人あり、施を行つて見ることを喜
ばす。有る人は施主を見ることを喜び、而も讚歎せず。其邪見を以て
施果を識らざるが故なり。是の如く各々に具足すること能はず。菩
薩は大悲心もて、深く善法を愛するが故に、能く四事を行ずること
上に説くが如し。菩薩若し但自ら布施し、他人に教へざれば、但能く
今世に少許の是衆生を利益し、業因縁に随つて貧窮の處に墮つ。是
故に菩薩は衆生に教へて言く、我財物を惜まず。我多く汝に施すと
雖も、汝も亦持して後世に至ることを得ず。汝今當に自ら作すべし、
復當に自ら得べし。布施の實の功徳種種の因縁を以て、衆生をして
施を行ぜしめ、施を行ずる者を見ては、是れ破戒の人なりと雖も、但
好心布施の徳を念じて、其惡を念せず。是故に歡喜讚歎するなり。十八

一七、四三
一に載す

復次に三寶無盡福田の中に施す故に、施福盡きず必ず佛道に至るを見る。其未來無盡の功德を觀るが故に歡喜して、是四種の布施を行し、世世に財富なり。是菩薩は財富の爲に布施せず、未だ阿耨多羅三藐三菩提を具足せずと雖も、六波羅蜜多等の法の中間にして、而も財富自ら至るなり。譬は人は穀の爲の故に、禾を種うれば、藁艸自ら至るが如し、菩薩は財物の報を得る時、慳貪の心を離れ、衆生の心に隨つて布施し、食を須る食を與ふ。

復次に菩薩は深く善法を愛す、布施は是れ初門なり。是故に是れ布施を行す。又菩薩は深く衆生を慈悲心大なりと雖も、而も能く衆生を充滿すること能はざるを以て、是故に先づ布施を行じ、其心をして軟ならしめ、以て引導すべからしむ。布施の因縁をもて四姓に生じ、及び轉輪王となる四攝法を以て衆生を攝取し、漸漸に三乗の法

を以て涅槃を得せしめ、他に布施を教へて、布施の法を讚歎せしめ、布施を行ずる者を歡喜し讚歎せしむ、是れ深く布施を愛し、同行を見るが故に、歡喜し讚歎するなり。九十一、五五 九二に就す

●同 上 其三 二十九

菩薩は身の貴ふ所の物を以て、所須に隨つて時に用ゐて供養す。或は以て地に塗り、壁及び行坐の處を塗るなり。又隨意の五欲を以て諸佛及び僧及び餘の衆生に供養す。是れ菩薩は好き車馬、妻妾、伎樂、旛蓋、金銀、衣服、珍寶を以て、出家の人の受ざる所は、則ち諸の衆生に施し、願を作して言く、我が國土の衆生をして、常に隨意に五欲を得せしめんと。

問て曰く、此五欲は佛は火の如く、坑の如く、瘡の如く、獄の如く、怨の

如く、賊の如くにして、能く人の善根を奪ふと説きたまへり、菩薩は何を以てか衆生をして、五欲を得せしめんと願するや、又佛は弟子に應に納衣にして乞食し、林樹の下に坐すべしと説きたまへり、菩薩は何を以てか衆生の爲に五欲を得んことを求るや。

答て曰く、天上人中の五欲は、是れ福德の果報なり、若くは今世、若くは後世、貧窮薄福の者は、自ら活すること能はざれば、則ち劫盜を行ひ、或は物の主となりて害せられ、或は賊と爲りて他を殺し、或は誥問せらるゝも、妄言して作すといふ。是の如く次第に十不善を爲すは、皆な貧窮に由るか故に作すなり。若し人五欲を具足すれば、則ち欲する處意に隨ひ、則ち十不善を行せず。是故に菩薩衆生の爲に、五欲を得んことを求るなり。菩薩の國土は衆生豊樂なれば、自ら恣にして乏少する處なく、則ち衆惡無し、但愛慢等の輒結使あるも、若し

佛の所説を聞き、或は弟子の所説を聞けば、心柔軟なるを以ての故に、法を聞て道を得べきこと易し、著心多しと雖も、利根の故に無常苦空等を聞けば、即便ち道を得、譬は垢膩の衣は、則ち灰泥を以て之を淹ふも、宿を経て水を以て洗へば、一時に都て去るが如し。菩薩は衆生をして、著せしめんと欲せざるが故に、五欲を以て施す。但一時に捨しめんと欲するが故に、之を與ふるのみ云云。九十三、五八九に載す

●著心の布施三十

問て曰く、菩薩、若し著心もて布施せば、何等の過あつてか、而も具足と名けざるや、著心の布施は、恩重からん。

答て曰く、小利ありと雖も、而も大過あり、美食に毒を雜ふるに美利ありと雖も、而も自ら命を喪ふが如し。

問て曰く、何者か是れ過なるや。

答て曰く、著心の布施は、意に稱はざることあれば、則ち悲怒を生じ。若し受者其恩を感せざれば、則ち怨嫌を成す。若し著心もて善人に供養するも、少しく凶衰あれば、則ち嫌ひ布施に應ずること無く、施す所を悔惜り、若し布施して心に悔あれば、受る所の果報則ち清淨ならず。

復次に著心の布施は、深心に財物に貪著す。若くは侵奪せらるゝことあれば、則ち害を加へて自ら念へらく、我れ福德好事の爲にし、而も能く布施して、後世の事の爲にし、愛惜轉た深し、深く著するを以ての故に、若し侵奪はるゝことあれば、能く罪を重くす。重罪の因縁の故に、三悪道の苦を受く。

復次に貪著の因縁の故に、瞋恚を生じ、瞋恚の因縁の故に、刀杖を加

ふ。刀杖し殺害すれば、諸の苦惱を受く。凡夫の性情は是の如し。六九四

●薩陀波崙品 其一 三十一

佛須菩提に告たまはく、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を求め、當に薩陀波崙菩薩摩訶薩、是菩薩の今大雷音佛の所にありて、菩薩道を行するが如くすべしと、須菩提佛に白して言さく、世尊よ、薩陀波崙菩薩は、云何が般若波羅蜜を求むるやと、佛の言はく、薩陀波崙菩薩は、般若波羅蜜を求むるに、身命を惜まず、名利を求めず、空閑林中に於て、空中の聲を聞く。言く、汝善男子よ、是より東に行き、疲極を念ふこと莫れ、睡眠を念ふこと莫れ、飲食を念ふこと莫れ、晝夜を念ふこと莫れ、寒熱を念ふこと莫れ、内外を念ふこと莫れ、善男子よ

行く時左右を觀ること莫れ、汝行く時に身相を壞ること莫れ、色相を壞ること莫れ、受想行識を壞ること莫れ、何となれば若し是諸相を壞れば、則ち佛法に於て礙ありと爲す、若し佛法に於て礙あれば、便ち五道生死の中に往來し、亦般若波羅蜜を得ること能はざれば、なり。

爾の時に薩陀波崙菩薩、空中の聲に報へて言く、我れ當に教に従ふべし。何となれば我れ一切衆生のために、大明たらんと欲し、一切諸佛の法を集めんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するが故なり。薩陀波崙菩薩は空中の聲を聞く言く、善哉善哉、善男子よ、汝空無相無作の法に於て、汝信心を生ずべし。相を離るゝの心を以て般若波羅蜜を求め、我相を離れ、乃至知者見者相を離るべし。當に惡知識を遠離すべし。當に善知識に親近し、供養すべし。何等をか是れ善

知識となすや。能く空無相無作、無生無滅の法、及び一切種智を説きて、人の心をして歡喜し、信樂に入らしむ。是を善知識となす。善男子よ、汝若し是の如く行せば、久しからずして、當に般若波羅蜜を聞くべし。若くは經卷の中より聞き、若くは菩薩の所説に従つて聞く、善男子よ、汝が従つて聞く所の是般若波羅蜜の處に、應に心に如佛の想を生ずべしと。經說上

○問て曰く、疲極飢渴の交も來つて身を切るに、云何か念はざるや。答て曰く、是れ欲及び精進力の故に、一心に佛道を愛樂し、身命を惜まず、飲食等を休息するは、皆是れ助身の法なり。是事來ると雖も心を亂さず、皆虚誑にして無常無實なること、賊の如く怨の如し。但身樂の爲の故に、何ぞ念を存するに足らん。飢渴疲極等の爲の故に、而も佛道を捨ること莫れ。晝夜を念ふこと莫れとは、晝は是れ法を行

じ夜は是れを止息すべしと念ふこと莫くんは實に晝夜なきなり。
 所以は何となれば日は須彌に依るも影の是れを翳すが故に、夜と
 名くるのみと、佛界にては觀するが故なり。内外を念ふこと莫れと
 は、衆生は多く内法に著す、内法を名けて身と爲し、外法を五欲と名
 く、内外法は不安性空の故に著すべからず。左右を觀ずること莫れ
 とは、人は心を散して道を行ずるが故に、左右を顧看す行者縁無く
 して後を觀じ、前に當れば則ち得ず得ざるが故に、但左右を顧看
 こと莫れといふ。
 復次に魔は常に行者を惑亂して、或は種種の形をなし、或は好色を
 爲し、或は畏獸を爲し、道の左右を有るか故に、觀ること莫れといふ。
 是れ皆其魔念を止んが爲なり。身相色等の相を壞ること莫れといふ。
 五衆和合の故に假りに名けて身となす、若し別に説けば、更に決定

して身法あり。是れ則ち身相を壞るなり。若し無身法に著すれば、是
 れ亦身相を壞す。是一異有無等の邊を離れ、中道を行ずれば、則ち疾
 かに阿耨多羅三藐三菩提を得、是故に身相を壞ること莫れ等と説
 く。此中に佛自ら因縁を説く、若し諸相を壞れば、則ち佛法に於て疑
 ひあり、佛法に疑ひあれば、則ち五常生死の中に往來して、般若波羅
 蜜多を得ること能はず。薩陀波崙空中の聲に報へて言く、而も自ら
 因縁を説く、所謂薩陀波崙は、一切衆生の無明黑闇の中に墮在する
 を見て、我れ然も智慧の光明たらんと欲し、一切衆生に煩惱あれば、
 我れ一切佛法の樂を設んと欲し、一切衆生皆邪道に墮ば、我れ是衆
 生の爲の故に無上道を求む、是三種の願は般若波羅蜜多を得れば、
 則ち能く具足すと。
 問て曰く、薩陀波崙は其形を見ず、但其聲を聞くのみ、何を以てか便

ち教を受るや。

答て曰く、人の求る所のことの急なるか故に、聲を聞けは則ち應ず、
薩陀波崙も亦是の如し。九十五、六八
四、に載す

●薩陀波崙品 其一二三十二

爾の時に薩陀波崙菩薩、是空中の教を受け已りて、是より東に行く
こと久しからずして、是念をなす。我れ云、何か空中の聲に問はざり
し、我れ當に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に
從つてか、般若波羅蜜多を聞くべきと。是の時即ち啼哭憂愁に住し
て、是念を作す、我れ是中に住し、一日一夜、若くは二、三、四、五、六、七日、七
夜を過ぎ、是中に住して、疲極を念はす、乃至飢渴寒熱を念はず、般若
波羅蜜多を聽受する、因縁を聞ずんは、終に起たざるなりと。須菩提

よ、中薩陀波崙菩薩は、爾の時に異心あること無く、但念ずらく我れ
何れの時か、當に般若波羅蜜多を聞くことを得べきや、我れ云、何か
空中の聲に問ざりし、我れ應に何處に去るべき、去ること當に遠近
なるべきや、當に誰に從てか、般若波羅蜜多を聞くべきと。須菩提よ
薩陀波崙菩薩の是の如く、愁念する時、空中に佛あつて、薩陀波崙菩
薩に語つて、言く、善哉善哉、善男子よ、過古の諸佛の菩薩道を行ずる
時に、般若波羅蜜多を求めしも、亦汝か今日の如し、善男子よ、汝は是
を勤めて精進し、法を愛樂するが故に、是より東に行き、此を去るこ
と五百由旬にして、城あり、衆香と名く、其城七重にして、七寶を以て
莊嚴せり。臺觀欄楯、皆七寶を以て校飾し、七寶の塹、七寶の行樹の周
匝すること七重なり、其城は縱廣十二由旬、豐樂安靜にして、人民熾
盛なり。五百の市里街巷、相當し、端嚴にして、畫の如く、橋津は地の如

く寛博にして清淨なり、七重の城の上には皆七寶の樓櫓あり寶樹
 行列し、黄金、白銀、車磔、碼碯、珊瑚、玻璃、紅色の眞珠を以て枝葉と爲る、
 寶繩連綿し、金は鈴網と爲り以て城の上を覆ふ、風鈴を吹くや聲其
 音と和雅して、衆生を娛樂せしむ、譬は巧に五樂をなさば、甚た悦喜
 すべきが如し、金網寶鈴その音是の如きを以て衆生を樂します、其
 城の四邊に流池、清淨にして冷暖調適なり、中に諸船ありて七寶を
 以て嚴飾す、是れ諸の衆生宿業の致す所にして、是寶船に乗りて娛
 樂遊戯す、諸の池水の中に種種の蓮華あつて、青黄赤白なり、其外衆
 の雜好華、遍く水上を覆ひ、是三千大千世界の所有の衆華、皆な其中
 にあり、其城の四邊に園觀有り、園觀の結構は、また之に準じたる美
 觀の莊飾有るも、茲に省畧す、是諸の衆生宿業の致す所に因て、長夜
 に深法を信樂し、般若波羅蜜多を行ずる因縁の故に、是果報を受く

善男子よ、是衆香城の中に大高臺あつて、曇無竭菩薩摩訶薩の宮舎
 上に有り、其宮の縱廣一由旬にして、七寶を以て校成し、雜色をもて
 莊嚴し、甚だ喜樂すべし、垣牆七重にして、皆な亦七寶なり、七寶の欄
 楯樓閣、また八池あり、其池は八種の功德香を成就し、若くは梅檀の
 色味を具足して、軽く且つ柔軟なり、曇無竭菩薩は六萬八千の姝女
 と共に五欲を具足し、共に相娛樂す、善男子よ、曇無竭菩薩は、諸の姝
 女と共に遊戯娛樂し、己つて、日に三時、般若波羅蜜多を説く、衆香城
 内の男女、其城中に於て、多く人の聚る處に、大法座を敷く、其座は黄
 金、白銀、琉璃、玻璃を以てし、敷くに、宛綖、雜色の因褥を以てし、諸の幃
 帶を垂る、妙白氎を以て其上を覆ひ、散ずるに、雜妙の華香を以てす、
 其地の四邊に五色の華を散じ、衆の名香を燒き、般若波羅蜜多を供
 養し、恭敬するが故なり、曇無竭菩薩此座上に於て、般若波羅蜜多を

説く、彼の諸の人衆かくの如く曇無竭を恭敬し供養し般若波羅蜜
 多を聞かたために、是大會に百千萬衆の諸天世人一處に和集す中
 に聴く者と受る者と持つ者と誦する者と又書する者と正しく觀
 ずる者と説の如く行ふ者と有り是時に衆生是因縁を以ての故に、
 皆な惡道に墮せず阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず汝善男子よ曇
 無竭に往詣して當に般若波羅蜜多を聞くべしと、以上經文
 爾の時に薩陀波崙菩薩歡喜し心に悦んで是念をなす、我當
 に何れの時にか是善男子を見ることを得て般若波羅蜜多を聞く
 を得べきやと須菩提よ薩陀波崙菩薩摩訶薩は更に餘念なく但是
 願をなす謂く我れ何れの時にか曇無竭菩薩を見ることを得て般
 若波羅蜜多を聞くを得せしむべきや我れ是般若波羅蜜多を聞て、
 諸有の心を斷ぜんとは是時薩陀波崙菩薩是處に住し曇無竭菩薩を

念し一切法の中に於て無礙の知見を得て即ち無量の三昧門の現
 在前することを得所謂諸法觀三昧諸法性不可得三昧破諸法無明
 三昧諸法不異三昧等の數多の三昧を得て是の如く薩陀波崙菩薩
 は是諸の三昧の中に住して即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見諸の
 菩薩摩訶薩のために般若波羅蜜多を説く。以上經文
 ○問て曰く薩陀波崙は何を以てか忘れて空中の聲に問ざるや。
 答て曰く薩陀波崙は大に歡喜して心を覆ふが故に忘れたり人の
 大に憂愁し大に歡喜せば此二の事を以ての故に忘るゝが如し。
 問て曰く空中の聲已に滅す何を以てか此に住すること七日にし
 て更に問處を求めざるや。
 答て曰く本と空閑の處に於て一心に般若を求るか故に空中に聲
 あるが如く今も亦一心に本の如くならんと欲し更に聲を聞て其

疑ふ處を斷ぜんと冀ふ。

問て曰く薩陀波崙は何を以てか憂愁すること愛子を喪ふ如くな

るや。答て曰く般若波羅蜜多は諸の中に於て第一なり實に是れ十方の諸佛の眞實の法寶なり薩陀波崙は少しく氣味を得るも未だ具足せざるが故に憂愁すること愛子を喪ふが如し其長大して成辨する處多きを念じ其力を得んこと冀ふ菩薩も亦是の如く般若波羅蜜多を増益し阿鞞跋致を得己つて佛事を成就せんと念ふ子の父に於て孝行し身を終るまで異心あること無きか如し般若波羅蜜多の菩薩に於けるも亦是の如し若し能く入るを得は乃至成佛まで終に遠離せざること父の子を見て心即ち歡喜するが如し菩薩は種種の諸法を得と雖も般若波羅蜜多を見るの歡喜に如かず子

の假に其名をなすが如く般若波羅蜜多も亦是の如し以下界す、九十七、六九四に觀す、

●薩陀波崙品 其三 三十三

是の時十方の諸佛は薩陀波崙菩薩を安慰して言はく善哉善哉善男子よ我等は本菩薩道を行する時般若波羅蜜多を求め是諸の三昧を得ること亦汝が今得る所の如く我等は是諸の三昧を得て善く般若波羅蜜多に入り方便力を成就して阿鞞跋地に住す我等是諸の三昧を觀ずるに法として三昧を出て三昧に入る者あるを見ず亦佛道を行する者を見ず亦阿耨多羅三藐三菩提を得る者を見ず善男子よ是れを般若波羅蜜多と名く所謂是諸の法あるを念はざるなり善男子よ我等は無所念の法の中に住して是金色身丈六の光明三十二相八十隨形好不可思議の智慧無上戒無上三昧無上

智慧を得て、一切の功徳を悉皆具足す。一切の功徳を具足するが故に、佛すら尙ほ相を取て説き盡すこと能はず、何に況んや、聲聞辟支佛、及び諸の餘人をや。是を以ての故に、善男子よ。是佛法の中に於て、倍恭敬し愛念して清淨の心を生ずべく、善知識の中に於て佛の如き想を生ずべし。何となれば善知識を守護せんが爲の故に、菩薩は疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。是時薩陀波崙菩薩十方の諸佛に白して言さく、何等か是れ我か善知識として親近し、供養すべき所の者なるや。諸佛薩陀波崙菩薩に告て言はく、汝善男子よ。曇無竭菩薩は世に教化し、汝をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしめ、汝を守護し、汝に般若波羅蜜多方便力を教ふ、是れ汝が善知識なり。汝曇無竭菩薩を供養して、若くは一劫、若くは二劫、若くは三劫、乃至百千劫を過るまで、頂戴し恭敬せよ。一切の樂具及び三千世界

の中の所有の妙なる、色聲香味觸を以て、盡く以て供養すとも、未だ須臾の恩をも報ゆること能はず。何となれば曇無竭菩薩摩訶薩は、因縁を以ての故に、汝をして是の如き等の諸の三昧を得て、般若波羅蜜多の方便を得せしむればなり。諸佛は是の如く教化し安慰し、薩陀波崙菩薩をして歡喜せしめ已つて、忽然として現せず。是時薩陀波崙菩薩は三昧より起ち已つて、復佛を見ずして、是念を作す。是諸の佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るや。復た諸佛を見ざるか。故に、惆悵して樂まず、誰れか我か疑を斷ぜん。と。復是念を作す。曇無竭菩薩は久遠より已來、常に般若波羅蜜多を行して方便力を得、及び諸の陀羅尼を得、菩薩法の中に於て自在を得て、多くの過去の諸佛を供養し、世に我か師と爲り、常に我を利益すと。我れ當に曇無竭菩薩に問ふべし、諸佛は何れの所より來り、去つて何れ

の所に至るやと。
 爾の時に薩陀波崙菩薩は、曇無竭菩薩に恭敬愛樂尊重の心を生じて是念を作す。我れ當に何を以てか、曇無竭菩薩を供養すべきや、今我れ貧窮にして華香、瓔珞、燒香、澤香、衣服、幡蓋、金銀、眞珠、瑠璃、玻璃、珊瑚、琥珀、無く是の如き等を以て般若波羅蜜多及ひ説法の師たる曇無竭菩薩を供養すべきことあること無し。我れ法は空しく曇無竭菩薩の所に往くべからず、我れ若し空しく往かば喜悅の心生ぜず。我れ當に身を賣り財を得て、般若波羅蜜多の爲の故に、法師曇無竭菩薩を供養すべし。何となれば我れ世世に身を喪ふこと無數にして、無始生死の中に或は死し、或は賣り、或は欲の因縁の爲の故に、世に地獄の中にあつて無量の苦惱を受て、未だ曾て清淨の法とならざるか、故に是故に説法の師を供養せんが爲に身を喪ふと。是時

薩陀波崙菩薩は、中道に一大城に入り、市肆の上に至りて高聲に唱て言く、誰か人を須めんと欲するや、誰か人を須めんと欲するや、誰か人を買んと欲するやと。爾の時に惡魔は是念を作す、是薩陀波崙は法を愛するが故に自ら身を賣り、般若波羅蜜多の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せんと欲す。當に般若波羅蜜多を行じて、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得べし。云何が菩薩は般若波羅蜜多を行じて、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得、當に多聞具足を得べきこと大海水の如し。是時に沮壞すべからず。一切の功德を具足することを得、諸の菩薩摩訶薩を饒益し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、我が境界を過ぎ、亦餘人を教て我れ境界を出て、阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。我れ今當に其事を壞すへしと。爾の時に惡魔は隱蔽して、諸の婆羅門居士をして、其自ら賣る聲を聞かざらしむるも、一長者の女は魔も

蔽ふこと能はず、其宿世の因縁を以ての故なり。爾の時、薩陀波崙
 は身を賣るに售れず、憂愁啼泣して一面にあつて、立て啼泣して言
 く、我れ大罪の爲に身を賣るに售れず、我れ自ら身を賣り、般若波羅
 蜜多の爲の故に曇無竭菩薩を供養せんと。爾の時、釋提桓因は是念
 を作す。是薩陀波崙菩薩は法を愛して自ら其身を賣り、般若波羅蜜
 多の故に曇無竭菩薩を供養せんと欲す。我れ當に之を試むべし、是
 の善男子は實に深心を以て、法を愛するが故に、是身を捨るや不
 を知らんと。以上經文
 ○釋して曰く、薩陀波崙は渴仰して、般若を聞くと欲する故に、十方
 諸佛の大衆の爲に法を説を見て、其心歡喜し、其意滿ることを得た
 り。諸佛は其信力の堅固にして、精進し、動じ難きを以ての故に、其心
 を安慰して讚て善哉、我本と初て菩薩道を行じて、般若を求る時も

亦汝が今の如く、汝憂愁して自ら徳の薄を謂ふこと、莫れと言へり。
 爾の時に、薩陀波崙は、大に諸の三昧力を得て、其心深く著す。是故に
 諸佛爲に諸の三昧性を求て、實體を見ず、亦三昧に入り、三昧を出る
 者を見ずと説く。そは衆生は空にして、法も亦空なるか故なり。諸佛
 は爲に略して、般若波羅蜜多の相を説いて、是法あるを念せず。所謂一
 切法は無相の故に、念著すべからず。我等は是無所念の法の中に住
 して、能く六波羅蜜多を具足す。六波羅蜜多を具足するが故に、金色
 身を得ること、經の中に説くが如し。諸佛は教化し、利喜して、其心を
 安慰す。
 問て曰く、若し薩陀波崙は、是三昧力を得ば、何を以てか、還て三昧に
 入らずして、十方の諸佛は何れの所より來り、去て何れの所に至る
 かを問ひ、而も見んと欲することを曇無竭に問るや。

答て曰く十方の佛は、尙ほ種種の因縁を以て、曇無竭を讚て世世に、
 是汝が師なりと謂ふ、是故に問んと欲するなり、是時に薩陀波崙曇
 無竭菩薩を念ずらく、是我か先世の因縁なり、是故に恭敬尊重の心
 を生じ、大功德有るを以ての故に尊重す、是先世の因縁の故に恭敬
 愛樂すと。

問て曰く、先には薩陀波崙大に世間の事に著せず、深く般若波羅蜜
 多を愛するが故に、憂愁啼哭すと説けり、今何を以てか自ら貧窮に
 して、供養なきを鄙むや、但だ好心を以て師の意に隨はば、則ち是法
 供養なり、華香を以て何かせんや。

答て曰く、法供養は上なりと雖も、而も世間の衆生の遠より來て、法
 を求めるを見るに、空にして所有なければ、則ち喜心を發さず、世法を
 以ての故に供養の具を求るなり。以上九十八、七十八に載す

●薩陀波崙品 其四 三十四

是の時に釋提桓因は、婆羅門の身に化作し、薩陀波崙菩薩の邊にあ
 つて行て問て言く、汝善男子よ何を以て憂愁啼哭し、顔色憔悴して
 一面にあつて立つや、答て言く、婆羅門よ、我れ法を愛敬するが故に
 自ら身を賣り、般若波羅蜜多の爲に、曇無竭菩薩を供養せんと欲し、
 今我れ身を賣るに買ふ者あること無し、是故に自ら念らく、薄福に
 して財寶物無し、身ら身を賣り、般若波羅蜜多及ひ、曇無竭菩薩に供
 養せんと欲するに、而も買ふ者無しと。
 爾の時に、薩陀波崙菩薩に語て言く、善男子よ、我れ人を須め
 す、我れ今天に祠んと欲して、當に人の心、人の血、人の髓を須むべし、
 汝能く賣て我に與ふるや、不や、爾の時に、薩陀波崙菩薩は、是念を作

す、我に大利を得第一利を得、我れ今便ち般若波羅蜜多の方便力を具足せんが爲に、是の心血髓を買ふ者を得んと是時に心大に歡喜し、悅樂して憂ひ無く、柔和の心を以て婆羅門に語て言く、汝の須むる所の者我れ盡く汝に與へんと。婆羅門の言く、善男子よ、汝何の價を須るや。答て言く、汝の意に隨て我に與へよと。即時に薩陀波崙は、右の手に利刀を執り、左の臂を刺して血を出し、右の髀肉を割て復骨を破り髓を出さんと欲する時、一長者の女有り、閣上にあつて、遙に薩陀波崙菩薩の自ら身體を割て壽命を惜まざるを見て、是念を作す、是善男子は何の因縁の故に、其身を困苦するや、我れ當に往て問ふべしと。長者の女即ち閣より下り、薩陀波崙の所に到て問て言く、善男子よ、何の因縁あつてか、其身を困苦し、是心血髓を用て何等をか爲すや。薩陀波崙答て言く、般若波羅蜜多の爲の故に、婆羅門に

賣與へて、曇無竭菩薩を供養せんが爲めなり。長者の女の言く、善男子よ、是身を賣らんとして、自ら心血髓を出して、曇無竭菩薩を供養せん、と欲するに、何等の功德利を得るや。薩陀波崙答て言く、善男子よ、是人は善く般若波羅蜜多及ひ方便力を學す、是人は當に我か爲に菩薩の作べき所、菩薩の行ずべき所の道を説くべし。我れ是法を學ひ、是道を學んで、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に依止となつて、當に金色身、三十二相、八十隨形、好大光、無量明、大慈、大悲、大喜、大捨、四無所畏、佛の十力、四無礙智、十八不共法、六神通、不可思議、清淨の戒、禪定、智慧を得べし。阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法の中に於て、無礙一切の智見を得、無上の法寶を以て分布して、一切衆生に與ふ。是の如き等の諸の功德の利は、我れ當に彼れに從て之を得べし。是時に長者の女は、是上妙の佛法を聞て、大に歡喜し、心驚て毛

豎ち薩陀波崙菩薩に語て言く、善男子よ甚た希有なり、汝の説く所の者は微妙にして値ひ難し、是は一一の功德法の爲の故に、應に恆河沙等の如き身を捨つべし、何となれば汝の説く所の者は甚大微妙なるが故なり、汝善男子よ、汝が今須る所は盡く當に相與ふべし、金銀眞珠、瑠璃、玻璃、琥珀、珊瑚等の諸の珍寶物及ひ、香華、瓔珞、塗香、燒香、幡蓋、衣服、伎樂等の供養の具をもて、般若波羅蜜多及ひ、曇無竭菩薩を供養せよ、汝善男子よ、自ら其身を困苦すること莫れ、我も亦曇無竭菩薩の所に往き、汝と共に諸の善根を植て、是の如き微妙の法を、汝が説く所の如く得んと欲するが故なり、爾の時に釋提桓因は即ち本身に復し、薩陀波崙菩薩を讚て言く、善哉善哉善男子よ、汝堅く是事を受て其心を動せず、諸の過去の佛の菩薩道を行ずる時も、亦是の如く般若波羅蜜多及ひ方便力を求め、阿耨多羅三藐三菩提を

得べし、善男子よ、我れ實には人の心、血、髓を用ゐず、但來て汝が願を相試むるのみ、我れ何等をか當に相與ふべきや、薩陀波崙の言く、我に阿耨多羅三藐三菩提を與へよ、釋提桓因の言く、此れ我が力の辨ずる所にあらず、是れ諸佛の境界なり、必ず相供養せん、更に餘願を索めよ、薩陀波崙の言く、汝若し此れに於て力無く、汝必ず供養を見んとせば、我が是身をして平復して、故の如くならしめよ、是時に薩陀波崙は、我が是身をして平復して、故の如くならしめよ、是時に薩陀波崙即ち平復して、瘡癥あること無く、本の如くにして、異ならず、釋提桓因は、其願を與へ己つて、忽然として現ぜず、爾の時に長者の女、薩陀波崙菩薩に語て言く、善男子よ、我が舍に來到し、須むる所のものあらは、我が父母に従て之を索めよ、盡く當に相與ふべし、我も亦當

に我か父母を辞し、諸の侍女と共に往て、曇無竭菩薩を供養すべし、法を求めんが爲の故なり。即時に薩陀波崙菩薩は、長者の女と俱に其舎に到り、門外に在つて住す。長者の女入て父母に白さく、我に衆の妙なる華香及ひ諸の瓔珞、塗香、幡蓋、衣服、金銀、瑠璃、玻璃、眞珠、珊瑚、琥珀及ひ諸の伎樂、供養の具を與へよ。亦我か身と及ひ、五百の侍女の先に給仕する所の者とをして、薩陀波崙菩薩と共に、曇無竭菩薩の所に到ることを聽許したまへ。般若波羅蜜多を供養せんがためなり。曇無竭菩薩は、我等が爲に法を説くべし。我當に説の如く行すべし。當に諸佛の法を得べしと。以上經文

○問て曰く、上に虚空の聲を聞いて、問はざるか。故に七日啼哭す、今十方の佛を見ず、何を以てか大に憂愁して、更に佛を見んことを求めずして、但曇無竭の所に於て、諸佛去來のことを問はんことを欲するや。

答て曰く、薩陀波崙は先時に肉眼あり、未だ三昧を得ず。深心を以て信じ、善法に著するが故に、大に啼哭す。今や諸の三昧力を得て、又十方の佛を見、諸の煩惱微薄し、著心己に離るが故に、但一心に念ずらく。我當に何の時に、曇無竭を見るべきやと。

復次に五波羅蜜多は、般若波羅蜜多の法を助と爲し。助法の中に檀波羅蜜多を首と爲す。薩陀波崙思惟すらく、我れ福田を尊重するこ

と得は、曇無竭菩薩は、當に助道法の根本を以て供養すべし。亦爲に起て衆人に發さんと欲すと、薩陀波崙は是れ智人なり、善人なり、貧窮にして而も能く供養す。何に況んや我等に於てをや。

復次に諸の善法を行する時、思惟する時、其味ひ各異なり。薩陀波崙は布施味を行ぜんことを欲す。是故に供養の具を求るなり。

問て曰く、薩陀波崙は是れ大菩薩にして、能く十方の佛を見、又諸の

深三昧を得、何を以てか貧窮なるや。
 答て曰く、有る人言く、此の人は家を捨て佛道を求め、富家に生ると
 雖も、道里懸遠にして、一身獨去し、財物を賣らさずと、有る人の言く、
 是れ大人なりと雖も、宿世の小罪の因縁の故に、貧窮の家に生ると、
 有る人の言く、是れ小人なりと雖も、先世に少しく布施を行せし因
 縁に、大富家に生る、蘇陀夷尼他等の如し、是れ諸天の供養する所の
 人にして、而も小家に生ずるなりと、貧に二種あり、一には財貧二に
 は功德法貧なり。功德法貧は最も大に耻べし、財貧は好人にも亦あ
 り。法貧は好人には無きなり、華香有ること無しとは、上妙の寶華あ
 ること無きなり。又少なきを以ての故に無しといふ、我れ若し空し
 く往けは、師は我か心を須めずと雖も、大喜を得ず。是故に身を賣ん
 と欲するなり。

問て曰く、若し身を賣て他に與へは、誰か此物を買て往て師に供養
 せんや。

答て曰く、捨身の即ち是を大供養なり、去往有ること無し。有る人の
 言く、是人は身を賣り、財を取て人に因て供養す、我れ供養せんが爲
 の故に、身を賣て奴となると、又有る人は言く、爾の時に世の好人皆
 法の如く、自ら身を賣ると雖も、主は必ず能く聽し、供養して而も還
 らんと。

問て曰く、若し長者の女聲を聞かば、何を以てか來て問はざるや、汝
 何を以てか自ら賣ると。

答て曰く、但空しく身を賣る事は軽く、身を破て心髓を出すことは
 重きをいふ。故に長者の女は發心せり、長者の女は閣上に住在して、
 遙に是人の自ら割刺するを見て、是念をなす。一切衆生は皆樂を求

め苦を畏て其身に貪愛す、薩陀波崙は而も自ら割刺す、是れ希有なりと。また先世の福德の因縁の牽所を以ての故に、即ち其所に往たりて問ふ、薩陀波崙は、曇無竭菩薩に供養せんと答ふ、復問ふ、何等の利を得るやと。答て曰く、般若波羅蜜多を菩薩の所學と名く、當に彼に從て聞くべし。我道を學んで當に作佛を得、一切衆生の爲に依止となるべし。

譬は厚葉樹は、蔭覆する所多きが如く、又熱き時に、曠野の險道に於ける、清涼の大池の如し、佛は功德現る、事を説て以て、發心すべきもののため、にす。復次に是故に我は是の老病生死所住の處なる、不淨臭穢の身を捨るなり、般若波羅蜜多を供養せんが爲の故に、佛身金色を得べきことは、先に説か如し、長者の女は世世に諸佛を供養し、善根を植て、智慧明利なり。是法を聞くや、其心に深く入り、大に

法喜を得、乃至心驚き、毛豎ち、薩陀波崙に語て言く、甚た希有なりと爲す。汝の讚る所の法は大に微妙なり。是一一の法のために、恆河沙等の如き身を捨つべし。何に況んや一身をやと。長者の女は、何の因縁の故に、其身を困苦するやを知らざるも、而も之を憐愍みて不可なりと謂ふ。今は無量無邊無比清淨の佛法を聞き、是因縁を以て得へきか故に、大に喜ふ。是故に法の爲に、恆河沙の如き身を捨つべしと説く。女の言く、汝は貧なるを以ての故に、自ら其身を困苦す、今に於て止むべし。汝か須むる所を恣にせよ、當に以て相與ふべし。我も又汝に隨て、而も此道を求めんと。問て曰く、是菩薩は既に自ら身體を割截す、云何か能く長者の女の與に多く佛法を説くや。答て曰く、是菩薩は心力大にして、身に苦ありと雖も、心を覆ふこと

能はず。是菩薩は始めに刀を以て、肉を割き血を流し、方に骨を破らんと欲するも、而も長者の女來つて、未だ大に悶えざるゆゑ、能く法を説くことを得、釋提桓因は、其心の定まるを知て、而も之を試むるのみ。故に言ふ所なく、即ち本身に復て讚て善哉と言ふ。汝か心堅く此事を受くとは、帝釋意へらく、如し汝今の生死の肉身は、未だ佛道を不得ざるも、能く是の如く身を惜まざれば、汝は久しからずして、當に一切法の中に於て、所著なきを得べく、無生法忍の中に住して、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ること、過去の佛を以て證となさんと。是の如き等の種種の因縁をもて、其心を安慰す。我は是れ天王なり、佛道を愛樂するが故に來つて相試み、汝か心の堅軟云何を知らんと欲するのみ云云。

問て曰く、是女は先に汝か須むる所の者は、盡く我に従て之を索め

よと言ひ、今何を以てか、我が父母に従て索めよと言ふや。

答て曰く、今既に將に歸りて舍に到らんとす、薩陀波崙に目あたりに見へて、舍に入り、父母に従て之を得るを以て愧て、前の言を稱へず。是故に先つ自ら父母に従て之を索めよと説くなり。又女の力は能く寶を得と雖も、子女の法なるを以ての故に、父母に従て之を求め、女既に舍に入るや、先つ許す所の如く、父母に従て索め、而る後に之を與ふ、其國に佛法ある事無く、是故に女に問ふ、阿誰か是れ薩陀波崙菩薩なるやと。時に女は見し所の如く、己に聞し所の如く、盡く父母に向て、薩陀波の事を説き、父母は我と薩陀波崙菩薩と俱に、五百の侍女併に供養の具を以て、曇無竭菩薩を供養することを聽ずべし。父母は其言を聞て、即ち聽して女の意の如く爲したり。

九十八七二
七に載す

●薩陀波崙品 其五 三十五

爾の時に父母は女に報て言く汝の讚る所の者は希有にして説く
 ことも及び難し是善男子は法の爲に精進して大に法相を樂しむ
 及び是諸の佛法は不可思議にして一切世間に於て最第一と爲し
 一切衆生歡樂の因縁なり是善男子は是法の爲に大に莊嚴す我等
 は汝の往て曇無竭菩薩に見えて親近し供養すること聽すべし汝
 大心を發し諸の佛法を得んが爲の故に是の如く精進す我等云何
 にしてか當に隨喜せざるべきと是女は曇無竭菩薩を供養せんが
 爲の故に聽許を蒙ることを得て父母に報へ言く我等も亦是に隨
 いて心歡喜す我終に人の善法の因縁を斷ぜざるべしと
 是の時に長者の女は七寶の車五百乘に身及び侍女と共に種種の

寶物供養の具を莊嚴し種種の水陸の生華及び金銀の寶華衆色の
 寶衣好香の櫛香澤香瓔珞及び衆の味の飲食を持し薩陀波崙菩薩
 と五百の侍女と共に各一車に載せ恭敬圍繞し漸漸に東に去つて
 衆香城を見るに七寶をもて莊嚴し七重に圍繞し七寶の塹七寶の
 行樹皆亦七重なり其城の縱廣は十二由旬豐樂安靜にして甚た喜
 樂すべし人民熾盛にして五百の市里街巷相當り瑞嚴にして畫の
 如く橋津は地の如くにして寬博清淨なり遙に衆香城を見るに既
 に城中に入り曇無竭菩薩の高臺法座の上に坐するを見無量百千
 萬億の衆恭敬圍遶して説法す薩陀波崙菩薩曇無竭菩薩を見る時
 心即ち歡喜す譬は比丘の第三禪に入るや心を攝して安穩なるが
 如く見已つて是念を作す我等儀は車に載て曇無竭菩薩の處に趣
 くべからずと是念を作し已つて車より下り歩み進む長者の女並

に五百の侍女亦車より下る。薩陀波崙菩薩は、長者の女及び五百の侍女と共に、衆寶を莊嚴し、圍繞恭敬して、俱に曇無竭菩薩の所に到る。

爾の時に曇無竭菩薩摩訶薩は、七寶の臺あつて赤牛頭の梅檀を以て莊嚴を爲し、眞珠の羅網を以て臺上を覆ひ、四角には皆摩尼寶珠を懸て以て燈明と爲し、及び四寶の香爐には常に名香を焼て、般若波羅蜜多を供養するが故に、其臺の中に七寶の大牀有り、四寶の小牀を重て其上に敷き、黄金牒書の般若波羅蜜多を以て、小牀の上に置き、種種の幡蓋を莊嚴して其上を垂覆す。薩陀波崙菩薩及び諸の女人は、是妙臺の衆寶をもて嚴飾せるを見及び、釋提桓因の無量百千萬の諸天と共に、天の曼陀羅華碎末の栴檀磨衆の寶屑を以て臺上に散し、天の妙樂を鼓て虚空の中に於て、此臺に於て娛樂するを

見るや、釋提桓因答て言く、汝善男子、知らざるや、此は是れ摩訶般若波羅蜜多なり、是れ諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ、菩薩を攝持す。菩薩は是般若波羅蜜多をもて、一切の功徳を成就して、諸佛の法一切種智を得と。是時に薩陀波崙菩薩、即ち歡喜し、悅樂して、釋提桓因に問ふ、橋尸迦よ、般若波羅蜜多は、諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ、菩薩を攝持す。菩薩は是般若波羅蜜多を學ひ、一切の功徳を成就して、諸佛の法及び一切種智を得と、今何れの處にあるや。釋提桓因の言く、善男子よ、是臺の中に七寶の大牀あり、四方の小牀を其上に重敷し、黄金牒書の般若波羅蜜多を以て、小牀の上に置き、曇無竭菩薩七寶の印を以て之を印す。我等は開き得て、以て汝に示すこと能はずと。是時に薩陀波崙は、長者の女及び五百の侍女と共に、供養の具なる華香、瓔珞、幡蓋を取て分つて二分と爲

くを得べしと。我れ是語を受て東に行き、東に行くこと久しからずして是念を爲す、我何ぞ空中の聲に問ざるや、我は當に何の處に去るべきやと、是より去ること遠きや、當に誰に従て聞くべきやと、我是時に大に憂愁し啼哭し、是處に於て住し、七日七夜憂愁するか故に、乃至飲食を念はず、但念ずらく、我何の時に般若波羅蜜多を聞き、佛身を見るに虚空の中に在つて、我に語て言く、善男子よ、汝を念じ、佛身を見るに虚空の中に在つて、我に語て言く、善男子よ、汝大欲大精進の心をして捨捨すること莫れ、是を以て大欲大精進の心を以て、是より東に行き、是を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名け、是中に菩薩摩訶薩有つて曇無竭と名く、是人の所に從て、當に般若波羅蜜多を聞くことを得べし、是菩薩は世世に是汝か善知識なり、常に汝を守護せんと、我佛に従て教誨を受け已つて、便ち

東に行きて更に餘念無し、但念ずらく、我何の時に、當に曇無竭菩薩の我が爲に、般若波羅蜜多を説くを見る可きやと、我爾の時中道に住し、一切法の中に於て無礙の知見を得、諸の法性等の諸三昧を觀ずることを得、現在前に是三昧に住し、已つて十方無量阿僧祇の諸佛の、是般若波羅蜜多を説くを見る、諸佛我を讚て善哉善哉善男子よ、我本般若波羅蜜多を求る時、諸の三昧を得ること亦汝か今日の如しと、是諸の三昧を得已つて、遍く諸の佛法を得るに、諸佛我が爲に廣く法を説き、我を安慰し、已つて忽然として現せず、我三昧より起て、是念を爲す、諸佛は何れの處より來り、去て何れの處に至るやと、我諸佛を見ざるが故に、大に憂愁し復是念を爲す、曇無竭菩薩は、先つ佛を供養し、衆の善根を植ゑ、久しく般若波羅蜜多を行じ、善く方便力を知て、菩薩道の中に於て自在を得、是我か善知識にして

我を守護せんと我れ當に曇無竭菩薩に是事を問ふべし。諸佛は何の所より來り去て何所に至るや。我今大師に問ふ。是諸の佛は何處より來り去て何處に至るや。大師に願くは我爲に諸佛の所從來所至處を説て我をして知ることを得せしめ。知り已つて亦常に諸佛を見ることを離れざらしめよ。以上經文を譯したる

○問て曰く、長者は貴くして而も力あり、云何が先に薩陀波崙を識らず、其功德を聞くが故に、便ち能く女及び其眷屬寶物を之に與て俱に去らしむるや。

答て曰く、長者も亦徳本を植るも、因縁少なきを以ての故に、無佛國に生じ暫く佛徳を聞くや、其宿識を發して、心即ち開悟する故に、能く發遣す譬は蓮華の生長し具足するや、日を見て開敷するか如し。父母は女の心の淳熟して不淨の行なく、操を持して忘れず、世の樂

を樂しまずして、但法利を求るを知り、其心至て制止すべからざるを知る、若し其意に違へは、恐らく自害せんと思惟し、籌量し已つて、既に其意を全うし、自ら功德を得歡喜して去らしむ。世間の因縁は深く著して解難きも、愛の至るか故に尙ほ違ふこと能はず、何に況んや佛道の爲の故に、其心清淨にして染著する所なくして、而も之を聽さざらんや。女は父母より法の爲にするを聽さるゝを以て、寶物を惜まず、亦隨喜の心を以て、之がために歡喜す。爾の時に衆の心既に定り、七寶の車を莊嚴し、大衆と共に圍繞して稍稍東に行く。是時五百の女の觀屬及び城中の衆人は、其希有にして及び難きの事を見て、皆亦隨ひ去る。人衆既に集り歡悦して共に行き、衆香城を渴仰すること、渴する者の飲を思ふが如し、漸漸に路を進み、遙に衆香城を見るや、乃至長者の女及び五百人と共に、恭敬圍繞して曇無竭

の所に往んと欲す。以下中界
 問て曰く、釋提桓因は、經の中に七寶の印を説くが如し。
 答て曰く、印とは、是れ曇無竭の眞實の印なり。常に自ら手に執て以て經に印す。有る人の言く、七寶の印とは、佛道を求めるに七大神あり、是れ執金剛の杵にして、常に曇無竭菩薩に給して、經文を守護せしめ、魔及び魔民をして、改て更に錯亂せしめず。般若を貴敬する爲の故に、人は但演説を聞て發心する所の者あり、人其莊嚴の文字を見、て、而も歡喜發心する者あり。是故に寶臺を莊嚴し、金牒書七寶印を用て印するなり。
 問て曰く、臺上に書寫する所の般若と、曇無竭菩薩の口に演説する所の般若と、二處俱にありと雖も、而も書寫する處のものは、能く人を益すること能はず、何を以て先づ臺の所に至るや。

答て曰く、書する所の般若は、法寶の中に入る。佛寶の次第は法寶にあるが故に、一人應に先づ供養すべし。曇無竭は一人なるが故に、僧寶には攝せざる所なり。是故に先づ法寶を供養す。又曇無竭菩薩の所説は、是法なりと雖も、而も衆生は人相を取るが故に、多く著心を生ず。若し書する所の般若を見て、人相を生ぜざれば、餘相を取て著心を生ず。雖も、人に著して患を生ずること少し。是故に先づ經を供養す。經法は諸佛すら尙ほ供養す。何に況んや曇無竭及び薩陀波崙をや。曇無竭は般若波羅蜜多に因るか故に、所因の本を供養することを得。何ぞ先づ供養せざることを得ん。是故に供養する所を分て、具に二分と爲すなり。
 問て曰く、菩薩の法は、先づ衆生の中に於て悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するか故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。今は但た曇無

竭の神力威徳を見て、云何が發心するや。
 答て曰く、發心に種種あり、説法を聞いて而も發心する者あり、衆生に於て慈悲を起して、而も發心する者あり、神通力大威徳を見て、而も發心する者あり、然る後に漸漸に而も悲心を生ず、智印經の中に説くが如し、愛に依て而も愛を斷し、慢に依て而も慢を斷すること、人の道法を聞て、是法に愛著するが如し、故に五欲を捨て出家す、又某甲の阿羅漢道を得と聞て、高心を生ずるや、此人は我事に勝る事無し、彼すら尙ほ能く爾なり、阿羅漢道を得、我にして何ぞ能はざらん、と、而も大精進を生じて、阿羅漢道を得、佛道の中も亦是の如し、長者の女等及ひ五百の女人は、常に深く貪り、勢力自在に樂しむ、聞くならく、往古に人あり、神力變化して寶物具足し、人中に天の樂を受け、後に曇無竭の臺觀宮殿を見、大法座の上に在て、坐して天人を供養

す、又供養する所のものを見て、虚空の中に於て化して大臺を成し、心即ち大に喜んで遭ひ難きの想を發すと、皆な福徳の因縁より、是事を辨すべきを知る、是故に皆佛心を發作し、聞て發心する所の者、皆な次第行を行す、毘摩羅結經の中に説くが如し、愛慢等の諸の煩惱は、皆是れ佛道の根本なり、是故に女人の是事を見るや、已に愛樂の心生じ、福徳の因縁を以て、是事を得べきを知るが故に、佛道の根本なりと言、是愛慢に因て、後に清淨の好心を得るが故に、佛道の根本なりと言、ふ、譬は蓮華の汗泥より生ずるが如し、發心して已に願を爲すこと、曇無竭のなす所の如く、我等も亦當に是を得べし、爾の時に、薩陀波崙等、頭面に曇無竭菩薩を禮す、華香の供養は貴からざるか、故に先にし、身を供養する事は貴重なるが故に、後に禮拜す、禮拜し已て、木般若を求る因縁を説く、經の中に説くが如し、我もと般若を求る時、

空中の聲を聞く、乃至我れ今大師に問ふ、諸佛は何の所よりか來り、
 去て何の處にか至ると。
 問て曰く、薩陀波崙は諸の大三昧を得て、所謂破無明、觀諸法性、等なり、
 云何が空を知らず、而も佛相を取て著を生ずるや。
 答て曰く、新發意の菩薩は、能く總相、諸法の空無相を知ると雖も、諸
 佛の所に於て深く愛著するが故に、佛相の畢竟空なることを解す
 ること能はず、空を知ると雖も、而も空と合すること能はず、何とな
 れば、諸佛には、無量無邊の實功德あれはなり、是菩薩は利根なるが
 故に、深く著す。若し佛是菩薩の爲に空を説されば、是菩薩は佛を愛
 するが爲の故に、能く自ら親族を滅す、何に況んや餘人をや。但空を
 解するを以ての故に、是こと無し。薩陀波崙は深く諸佛に著するが
 故に、知ること能はずして、而も今大師に問ふ。今我が爲に諸佛來去

の相を説きたまへ、是れ佛身を見て厭足なきが故に、常に諸佛を見
 ることを離れずと。九十八七三
四に觀す

佛神感應之實現了

大正十年十一月拾八日印刷
大正十年十一月廿三日發行

定價金參圓

不許複製

著作人兼
發行人

沙門山岸乾順

印刷人

大阪市南區鍛冶屋町四拾番地

磯野利木松

大阪府下攝津國東郡神路村大字大今里

無畏城 妙法寺藏版

新著發行目次

沙門乾順著

佛神感應之實現

菊判形

全一冊

本書は信念法の秘訣にして、殊に緒言と凡例は遺言法を載す、

綴子表紙和製 原價金三圓 遞送料無し

本書は予が茲に十餘年間鎮宅靈符神を信念して、澆季の現代に於て佛の靈應を實現し得たる事實を叙述す、曾て八宗の祖師龍樹菩薩の智度論にある般若の感應の詳説と恰も符節を合すが如し、故に智度論のより現代に緊要適切な條項を摘撰して本文と爲し、予が實踐躬行の事を緒言と凡例に縷述し、感應之實現と題名せし所以である。

譯國 大般若經理趣分

神佛の祈念に感應の實現は、此御經の讀誦を以て最上と爲す、

金襴表紙上製 原價金三圓五拾錢
緞子表紙 原價金貳圓五拾錢
遞送料 無し

折本帙入

全一卷

夫れ釋尊の經卷數多ありと雖も、其中に大般若經は貴重最尊なるが故に、各宗共に轉讀を修行あることは衆人の周知に囑せり、抑も般若は世間法に超越し、現世の利益の廣大無比なる所以を智度論に極論し玉ふを信じ、茲に十餘年間毎且に訓讀し、靈符神の感應の實現と併て、靈應を實地に感得したり、是故に今回國譯と爲し、信者諸彦に頒布せんと期圖して發行せし故、四方の同志の御仁に知らしむ。

沙門乾順著

鎮宅靈符神

洋

全綴一冊

紙數四百三十餘頁
原價 金三圓五拾錢
送料 金貳拾錢

本書は人世に望む福壽を圓滿に享け、災厄を免る靈符にして、天下に無比の神なり、往昔は皇室を始め國民も皆祭祀したる實徴あるも、時勢遷して、遂に世人が靈符の名稱も知らざる者多きに到れるを惜み、本書を著し、靈符尊神の由來及び現世に應感の迅速なる事并に祭祀法を始め、信仰の緊要なる所以を詳述し、已に十餘年間知人に信念する事を勸め、靈應を皆實地に享る者を確認し、今復更に宣傳す、請ふ益々信念を凝らし、人世の災厄を免れ、禎祥幸福を享け、家運長久に安泰に生活せられ、事を渴望する爾。

1927
529

終

